星降る夜になったら

白色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星降る夜になったら

【Ｎコード】
Ｎ７８０５Ｐ

【作者名】
白色

【あらすじ】
季節は、秋。何もないと思い込んで生活を送る星河スバルだったが……秋といえば？

秋、といえば？（前書き）

時間がない、でも小説書きたい。
そんな感じで書き始めたので、超ライトです。
ストーリーも曖昧にしか決まってなく、先行き不安な作品ですので、皆様もさらっと読んでください。

設定等は僕の以前の作品と同様のつもりで書いていきますが、特に知っている必要もないですし、何かあればその都度適当に説明します。

はい、というわけで、不定期更新、亀行進。
よろしくお願いします

秋、といえば？

「……暇だねぇ」
「いやなのか？」
「ううん、最高」
「……ならフラグ立てるようなことは言わねぇこったな」

うん？
好戦的で退屈が大嫌いな宇宙人、もとい僕の少し恥ずかしいウィザードであり、大切な友人でもあるウォーロック（名前がすでに野蛮だね）が珍しくまともなことを口にしてるけど。

……大丈夫かな。
ウィルスじゃないよね？
この僕だってそんな難しい言葉、最近知ったのに。
どこで覚えてきたんだ、まったく。
きっと、また勝手にネットにダイブして要らん事物を……。

……まぁいいや。何を言ったって、今更だ。

ロックの素行も。
僕がそのことで叱咤する構図も。
まるで彼の意に介さない、反省しないことも。
出会った時から、なぁんにも変わっちゃいないことも。

半ばこれからの自分の人生に悲観的な見立てをつけながら、今の季節らしく、どこか白み帯びている青空に視線を戻す。中空を眺め

る。平たく言うと、ぼーっとし始めたわけだ。

色んな意味で熱く燃え上がった夏も過ぎ去り、いつの間にか肌寒いくらいに冷却されて、暑がりの僕にとっては万々歳な今日この頃。

――いかがおすごしでしょうか、なんて手紙がきたら、返答に困ってしまうくらいに、のどかな生活を送る日々。

季節は、秋。

……はぁ、最高だぁ。

それに僕の狭い世界だけでなく、もっとグローバルな目で見ても、近頃はサテライトポリスから僕に出動要請あるような大きな事件もなく、平穏だ。

お昼時のワイドショーでは、取り上げるネタに困った一部のマスメディアが主体となって、事件を起こそうなどと画策し、その情報が流出するなんていう馬鹿なニュースが報道され、お茶の間を驚かせたほどだ。

もっとも、世界では今だ争いの種は尽きず、戦争や紛争、殺人だって毎日のように起きていて、何百何千という人々が、一日一日、命を落としているだろう。語弊があっては困るのでここでは、新たな争い事、個々の範囲では済まされない大事件が起きていない、という意味での平穏であることをはっきりさせておく。

……平和はいいねぇ。

そうは言っても、僕の生活は微動だにせず、まったくの平和なのだから、自然とその言葉がこぼれてしまっても、どうしようもない。

全世界の情勢を気にして、一喜一憂できるほど、僕は人間的に成長していない。また、できるとは到底思えない。
神様じゃないんだ。そう開き直らせていただきます。

「おい、スバル。委員長から着信だぞ？」
「なん……だと……」

……おぉ、神よ。
たったこれだけの矛盾さえも。あなたはお許しにならないのか。

……。

「はい」
「スバルくん？　今すぐ私の部屋に来て」
「はい」

通話時間　４秒。
通信は音もなく切れ、ハンターＶＧにその文字が虚しく映し出される。
ただ、これだけのことで、これほどの時間で、僕の無事な生活は崩壊してしまうのか。
構築には膨大な時間と労力を要するが破壊は一瞬である、よく言うけど、身をもってわかった。

あぁ、人の営みとは一体……。

「ひひっ、やっぱりだな。余計なこと言い過ぎなんだよ。おまえは」
ロックは、およそ知的生命体にそぐわない嫌らしい笑みを浮かべつつ、当て付けのように辺りをはしゃぎ回る。

うぅ、悔しいがロックの言う通りになってしまったようだ。
……うん、自分でも途中からわかってたけどね。なんか、こう、胸騒ぎがするような、あれ、思考がどんどん悲劇を呼び起こそうとしてない？　みたいなことは感じてたよ。

「それもこれも、ウォーロックが野蛮人なせいだ」
「あぁん！？」

……まぁいいや。まだ決まったわけじゃない。
一緒にお茶飲みたかっただけなんだからっ、的な展開を妄想しながら生徒会会長室に向かうとしますか。

秋、といえば？（後書き）

感想、アドバイス等くださると嬉しいです

文化祭、といえば？　０１

連絡があってからすぐに生徒会長室の手前までやってきたが、どうにもその仰々しい扉を開けるのを躊躇ってしまう。
ここに来るまでにあれやこれや、と現実逃避に甘ったるい妄想に耽りながらも、僕なりに覚悟を決めてきてはいたのだが、いざっ、となるとやはり中で待つ逆らえない恐怖に身悶えてしまう。
原始的な本能だろうか。

少し前の、生徒会長選挙のとき、委員長はもう一人の候補者と露骨な人気取り政策を応酬したあげく、その相手の候補者が生徒の目の行かないところで委員長の選挙活動を妨害するなど、近年に類を見ない凄まじい激戦を繰り広げた。
最終的にその妨害活動が、皮肉にも候補者の人気を地に貶め、票が委員長の方へ流れてくる形で終結している。

委員長は、そんな相手側の自業自得とも言える失策で、自分が当選したことを、未だに根に持っているらしい。

それはそうと、僕はその当時、委員長の後援会のような、工作員のような、非常に危うい立場にありながら、裏で活動をしていたこともあり、その功績が認められたのか、白金内閣発足後も非正規役員として、主に非合法的な仕事を任されていたりする。

要するに、好いように使われてるってことなのですよ。

結果、不正が発覚しようと、こいつが勝手にやりました、の一言で責任転嫁でき、なおかつ生徒会は不利益な危険分子を削除できてるのだから、これ以上使い勝手の好い駒はないだろう。
そのための非正規役員なのだ。

昔のことつらつらと何が言いたいのかというと……早い話、こうしておろおろと生徒会長室前で、初めて彼女の家を訪れた彼氏の如く醜態を晒すのはこれが初めてではないのだっ！

……。

自分でも物凄く情けないのだが、これがどうにも……。

裏工作のときにこき使われていることと、第一印象から変わらない委員長への本質的恐怖が合間って、き、緊張感が……。

……。

……。

……ぐっ。

こ、この手が震えて……くそっ、この、言うことを聞けっ！

……。

……。

「……スバル君。その、なんでドアの前で、そんなわなわなしてるの？」

ドアノブ相手に悪戦苦闘していると、突然、脇から上擦った声が聞こえた。

……ふっ、今はこのくらいにしといてやるよ。

忌ま忌ましげにドアノブを睨みつけてから、振り返ると、紅髪ショートカットの愛くるしい女の子……いや、ミソラちゃんが若干引いた様子でこちらを見ていた。

友達が足を半歩退いて、すぐにでも逃げられる体勢をしているという事実が、地味に心を傷つける。

……。

響ミソラ。この学校に入学する前は、日本を代表するアイドルとして世に名を馳せていたが、現在は休職中。

委員長ならまだしも、僕やツカサ君などが私立中学なぞを受験するきっかけをつくる。

というのも、僕らが小学六年生の時の初冬。ミソラちゃんが、この辺りではそこそこ名の知れた進学校であるこの学園に（裏口）入学する、という情報がどこかからもたらされ、舞い上がった僕らは受験日まであと僅かだというのに挙兵し、誰もが予想だにしなかった奇跡の合格をしてみせたのだ。

うーん、今になって考えると、自分でも当時の僕らはアホだったとしか思えない。
受験ナメてるよ。
ただ、それでも受かっちゃうんだから、欲望の力って恐ろしいね。

ちなみに、何故、進学校なのかと言うと、アイドル・響ミソラに高学歴という新たな武器を取り入れたいという芸能事務所側の陰謀である。
一方で、何故、裏口なのかと言うと、当然、アイドル・響ミソラに受験に合格できる最低限度の学力がなかったからである。

しかし、それってさ、やる方もやる方だけど、認めちゃう学校側もどうなのよ。

……。

この国の人口の大多数を魅了していただけあって、その顔立ちは端整で、十代半ばらしく、童顔のもつ愛くるしさの中に、僅かな大人びた凛々しさがある。

普段は欝陶しいくらいに甘えん坊なのに、たまに真面目になると、これがまた鋭いくらいに綺麗だったりするから、ビビッとくるというか……このギャップに、世の男性はイチコロなのだ。

しかし、このままもう少し年を経れば、小動物のような可愛いらしさを卒業し、とてつもない美人になりそうではある。
喜ばしいことなのか、残念なことなのか、判断に迷うところだ。

それらを総じて、過去、未来のどこの時点においてもミソラちゃんの容姿に関しては、きっと非の打ちどころがないだろう。

まぁ、強いて挙げるとすれば、現在バストがまだまだ未発達なとこか……？

「……」

二重目蓋の下の、透き通ったエメラルドの瞳が、僕の目をしっかりと捉えて、何かを咎めるように見上げてくる。

……？

え、いや、なんのこと？

「今、失礼かつ、いやらしいこと、考えてたでしょう？」

「や、やだな。あはは……」

むぅ、僕としては視覚情報を正確に言葉に起こ……ちょ、あの、冗談だからそんな恐い顔しないで。

「と、ところで、ミソラちゃんはどうしてこんなところへ？」

露骨にため息をついて、呆れた様子のミソラちゃん。

やだね、同級生に見透かされるのって。

「委員長に呼ばれたの。問答無用でね」

「あ、なんだ。ミソラちゃんもか」

「え、スバル君もなの？」

「うん、実はね。来て、の一言で電話切るんだもん。断る暇もなか

った」
「そ、そうなんだ。……私、てっきり本気で委員長を襲いにきたのかと思ってた」
「いや、いくら思春期真っ只中の僕だからといって、白昼堂々犯行に及ぼうとはしないぞ？」

っていうか、いつだってしないからね！？
いくら僕だって委員長を襲うなんて、そんな恐ろしいことできるかっ！
逆に殺されるわっ！

……。

……たまに委員長がデレた時に、堪え切れなくなりそうな気持ちになることはあるけど。

「ま、まぁ、誤解も解けたことだし、入ろうか。一緒に」

ともかく、ここでミソラちゃんと行き会ったのは、なかなか心強いことだ。
……あの委員長と一対一で話し合わなくて良いっていうのは、けっこう気が楽になる。
特にこういう仕事関係のことだと、委員長は妥協しないからね。
ミソラちゃんのもつ天性の癒し効果に期待しよう。
それでも恐いけど……。

……。

よしっ。

「失礼しまーす」

ミソラちゃんが見ている前ではみっともない真似はできないので、こともなげにノックしてみせる。

程なくして委員長の声が聞こえ、僕たちは扉を開けて中に入った。

文化祭、といえば？　０１（後書き）

本当はひとつにまとめてから投稿しようと思っていたんですが、このペースでは一生終わらないような気がしたので、とりあえず更新しちゃいました。

ご意見、ご感想、お待ちしてます。

文化祭、といえば？　０２

扉を開け、意を決して中に飛び込むと、委員長が黙々と資料に視線を落とし、顎に手をあて何やら真剣なご様子。
その表情からまた何か悪巧みをしているような印象を受ける。

……僕には関係ありませんように。

ともかくそれは、自分で呼んだ来客に臨む姿勢では決してないと思うけど、いつものことだし、何か言って怒られるのも嫌だから置いておくとして、……ねぇ、とりあえず、誰かこの状況説明できる人いない？

「あ、スバル君にミソラちゃん。ようやく来たね」

部屋に備え付けの簡易給湯室から、お盆にお茶をのせたツカサ君が不意に姿を現した。

話せる人の登場、か？

「やっほー……って、それよりあれは何？」

ミソラちゃんも同じく、それに疑問あるいは嫌悪感を抱いたらしく、問題のものに指を差して尋ねる。
その先には、僕たちの知人が目を背けたくなるような恰好で、それぞれ自分の存在を主張していた。

異国のワイルドボーイ、ジャックは朝方の駅のホームのベンチを占領しているサラリーマンのように、ソファの上で勢いよく脚を広げ手を広げ、この瞬間こそが人間の至極の幸福の時だと言わんばかりの表情で、よだれまで垂らして、豪快ないびきとともに寝ている。……いや、死んでいるのかもしれない。

それでもこちらはまだ無意識下だから見苦しいけれど、しょうがないかもしれない。

ただ、もう一人は自分の意思によって自ら不恰好に振る舞い、周囲の空気を乱しているのだから、友人として何だか悲しくなってくる。

当学校の最低身長記録保持者、最小院キザマロは何故か部屋の隅の壁を使って、シャツが垂れてお腹が丸出しの情けない倒立を決め込んでいる。

さらに、すでに始めてから大分時間が経っているようで、限界を通り越しているのか、顔色が赤と青を交互に行ったり来たりしていて、見ていていたたまれない気持ちになる。

今にも吐きそうだ。

「なんでもジャックは、新しく出たゲームのやり過ぎで最近家で寝てないから、学校で睡眠時間稼ぐんだって。ふふっ、誰よりも早く全クリしないと気が済まないタチなんだってさ」

それ、損な趣向だと思うよ。

「キザマロはね、いつもの」

「あぁ、いつもの」
「やっぱりか……」

キザマロは自分の身長に酷くコンプレックスを抱いていて、小学生の頃からわけのわからないセミナーに通ったり、胡散臭い器具を買ったり、いろいろしてはいるけれど、僕が見る限り出会った当初から今現在まで、まったく伸びてないし、気配や傾向すら見当たらない。

やっぱり気にし過ぎるとダメってことなのかな？

「じゃあ、放っといて大丈夫なんだね？」
「うん。やらせてあげて」

……。

お茶を委員長の机に置いて戻ってきたツカサ君は、ミソラちゃんと同じくらいの長さの緑の髪を揺らして、何か楽しそうに僕の顔を見つめる。

え、僕、なんか変？

「ど、どうしたの？」
「いやぁ、スバル君と久しぶりに話せて嬉しいなって」

ぶはっ！
いやいやいや、そんなこと顔赤らめた男に言われると、なんだか照れる……。

っていうか、なんで上気してんのっ！？

「な、なんだよ。クラス一緒なんだから、いつも会ってるだろ？
それに今日だっていっぱい話したし……」
「ははっ、スバル君、何慌ててるのさ。……だって僕たち、男同士だよ？」
「……スバル君。まさかツカサ君ならいけちゃうの……？」

ちょっとぉぉ！？
なんなのそれっ！？

っていうか、ミソラちゃんも簡単に騙されないでっ！！

……くそっ、でもなんだか、ちょっとだけ残念な気がす……じゃなくて、今はミソラちゃんに真実を伝えなくてはっ！

「ち、違うよ、ミソラちゃん！　僕は純粋に女の子が大好きなんだ！」
「……スバル君、その言い方はやらしい」

くぁっ！！
に、二重トラップだと……！？

うぬぅ、ツカサ君め、やってくれたな。
こんな恥ずかしいこと大声で叫んで……これじゃ僕が女好きの変態みたいじゃないか！

「そ、そうじゃなくて、僕は……」
「ほら、みんな！　集まったんだから話、始めるわよ」

って、いいんちょぉぉーー！

さっきまでチラチラこっち見て笑ってたくせに、このタイミングでそれはないでしょっ！

……。

よし。

せっかくだから日頃の鬱憤をこの機に乗じて晴らさせてもらおう。

些細なことでブチ切れてやる！

キレる若者は恐いんだぞっ！

手の平の汗を見えないところで拭って……いっぱい、息吸って……すぅー、っと、よし、では。

せーのっ！

「ィ……」

「……」

……いや、あのまだ何にも言ってないんですけど？

これから「委員長、僕はあなたのためなら何でもします」って言おうとしたんだよ？

なのに、なんで、その、可愛いうさぎちゃんくらいだったら平気で殺れちゃいそうな眼力をこちらに向けるんですか？

いくらなんでも発言権すらもらえないなんて、理不尽過ぎるでし

ょう。
一生ついていくって言ったって、僕だって人間なんだから、それくらい……。

え？　ジャックを起こしなさいって？
はい……それはもう、今すぐに。
だから、その……殺さないでくださいぃぃっ！！

文化祭、といえば？　０３

「ほら、起きろ。ジャック」
「……んがっ」

怖い顔つきのくせに、子供みたいによだれたらしちゃって……。
そのギャップには誰も萌えないんだからな。

「……んがっ、姉ちゃん、今日は……」

今日は……なんだよ。
平日だし、何より今現在学校にいるの忘れるなよ。

ジャックとその姉ちゃんは、数年前世界を揺るがせたキング財団による孤児兵隊化事件の被害者だ。
小さい頃にある施設に拾われた彼らは、そこで犯罪的な知識（おかしな言い回しだが間違ってはいない）を、一般常識であるかのように教育され、そしてある時電波変換の技術を提供されたのだ。
これによって彼らはこの後に起こる、かの有名なメテオG事件の主犯格に、若干の違和感はあるが簡単に言えば、仕立て上げられてしまう。
もちろん、このことは世間では知られていないし、むしろ一般的には非人道的な教育を受けさせられた可哀相な子供たちとして認知されている。
裏事情を知っている者たちの接し方も、大袈裟に気を遣うわけで

も、またその逆でもなく、適切なアフターケアが行われていると言っていいだろう。

だからこそ今こうして幸せそうに踏ん反り返っていられるわけであって、現状としてはもう僕らに出来ることなどないのではないだろうか。

あとは自分たち次第だ。

……。

とりあえず、今、僕は彼を起こさなければならない。

「姉ちゃん……、暁さんと、結婚しないでよぅ……」

暁さんとは、サテラポリスの星、イケメンウェーブバトラーである。

……。

もう少し聞いていたいけど、僕は委員長の脅は……んんっ、善意によって派遣された使者であるのだから、私情を挟むことはできない。

さぁ、優しくしてるうちに早く起きるんだ。

上からはすでにヒューマンビンタの使用が許可されているのだぞ。

もうこれ以上僕の力で圧力を抑え込むことはできないっ！

「……んがっ」

「……起きろ、早」

「……スバ」

「ていっ！」
「んがぁぁっ！」
左頬に強烈な平手打ちが炸裂ぅ！
弾け飛ぶジャァァック！
悪いっ、許せ！
これも生きるためなんだっ！
……。
「それでいいのよ」
い、委員長、あんたは鬼か。
この血みどろの戦場を見て、何も思わないのか。
仲間が顔から床に落ちた衝撃で鼻血出してるんだぞ？
何が起きたのか理解出来ないのに涙目なんだぞ？
「さぁ、会議よ。会議！」
メンバーが揃って、勇む委員長。
ジャックの様子など、歯牙にもかけない。
「だ、大丈夫かい？　さぁ、僕の肩に掴まるんだ」
一方、戦場に咲く一輪の花だ！
ツカサ君が男の子となにかしていると、熱い友情風景ではなく甘い恋愛物語に見えるのは何故だろうか。

……。

もうやめよう。

次、真面目にいきまーす。

＊

「それで僕たちに何のようなんだ。勢揃いするのも、最近では珍しいよね」

委員長、僕、ミソラちゃん、ツカサ君、ジャック、キザマロ。

見事にコダマ小同期卒業メンバー全員集合だよ。

……あ、ゴン太がいないのは、僕たちの中で唯一受験に失敗したからだ。

「さんざん待たせたあげく、私より先に口を開くなんて、ずいぶんね。言うまで待ちなさいよ」

あらあら、ご立腹なようで。

やっぱりふざけ過ぎだよね、反省反省。

これ以上ないくらいに白くて張りのある肌とくるくると整った巻き髪が象徴的で、いかにもお嬢様といった気品に溢れている。人遣

いが荒いところも、すでに人の上に立つ者として堂に入っている。

ただ、如何ともしがたいのはその目つきである。

まつ毛の長い二重目蓋で、本来ならくっきりパッチリおめめでもいいはずなのに、意図的なのか物凄く鋭いのだ。

それさえなければ、〇〇は俺の嫁ランキングで断トツトップのミソラちゃんの連覇を阻む好敵手と為り得るかもしれないのに。

まぁ、本人たちは望んでいないだろうけど。

……。

「って言ってもね、あなたたちに意見を求めたいのよ。文化祭の運営についてね」

意見を求めるぅ？

独裁者の委員長が政策に民意を反映させようっていうのか？

「委員長が私たちにアドバイスしてほしいなんて凄いね！　いつも一人でなんでもできちゃうのに。……頼りにされてるんだ！　私たち！」

ミソラちゃんが跳びはねて言う。

その気持ちはわからないではない。

堅物の委員長から頼りにされるのは、まぁ、悪い気はしないよね、なんだかんだ。

「頼りにしてるとか、そんなんじゃなくて、ただ訊いてるだけよ」
「照れなくていいよーっ。わかってるんだから」

じゃれる女の子二人をニヤニヤと見守る男三人。
なんだろうね、この構図は。
癒されるけど。

話もなかなか進まないしさ。

「そ、それより……こらっ、そこ、触らないでよ！　……んんっ、みんなわかってると思うけど、文化祭は生徒会が主催する最初の大きな行事と言って良いでしょう。生徒の心を掴むためにも、どうしても成功させなければなりません」

改まった口調で説明を始める。
いよいよ本題、そんな緊張が表れる。

「我々生徒会は夏休みを挟んでいるとはいえ、まだ発足したばかりで、目立った業績を挙げていません。そこで、次の文化祭では、例年にはない大イベントを実施したいと考えているのですが、何かありませんか？」
「なかなか委員長らしいアイデアだと思うけど、別にそこまでする必要あるのかな？　毎年毎年、普通にやって普通に成功して生徒も満足してるんだから、無理してそれ以上のことなんてしなくてもいいんじゃないかな？」

ツカサ君が真っ向から話の腰を折るようなことを言い出す。
彼はあれでいてなかなかの勇者だ。

保守派の勇者だ。

「それに、生徒会長を前にして言うのは心苦しいけど、普通、生徒会って決めるときだけ大騒ぎして、決まっちゃったらそこまで目立たないよね。何か素晴らしいことをやってるとは思うけど、あまり表にでないっていうか……」

「それよ！　それっ！」

委員長がたまり兼ねたのか、前のめりになって突っ込みを入れる。

「ツカサ君。生徒会に所属しない人に言うのは心苦しいけど、あなた、自分で全部喋ってるじゃない」

……。

「おかしいと思いなさい。例年通りやってると目立たないのっ！私はそれじゃダメだと思うから、私が変えるのよ！」

おぉ、委員長の目がキラキラと輝いている。

ぐっ、こ、これは、ずるいな……。

男として、助けなきゃいけないような気になってきちゃったじゃないか。

「イベントでより多くの人を集めて、白金内閣の名を天に轟かせるだけでなく、より多くのお金を集めて、次代の生徒のために残していくのよ！」

い、委員長……。

今まで目つき悪いとか独裁者とか言ってて、ごめんなさい！

今度こそ、正真正銘心の底から本音を言うよ！

「委員長。僕はあなたに一生ついていく」

……。

これでいいんだよね？

文化祭、といえば？　０４

僕の愛の告白から一刹那置いて、委員長は顔を赤く染めて背中を向け、ミソラちゃんからは嫉妬と思われるジト目で睨まれ、他三名は中学生男子らしく今や好機とばかりに一斉に揶揄するなんてことが、あったとか、なかったとか。

それはともかく、真面目な流れは崩さないでいこう。

「それで？　僕たちは具体的にどんなことを提案すればいいんだ？」
「盛り上がれば、なんでもいいのよ。もちろん中学生の常識の範囲でね」

うーん、そうざっくり漠然と尋ねられちゃうと答えにくいよね。
テスト前に先生のところへ質問に行く生徒がよく口にする、どこがわからないのかすらわからないってやつと同じだ。

……。

「ほら、何かないの？　早くしなさいよ」
「そろばん大会」
「だめ」

シュン、と目に見える勢いで小さくなっていく。
誰なのかは言うまでもないだろうが、僕はサディストなのであえ

て言おう。

キザマロである。

もともと小さいのに、委員長の容赦のない突っ込みによって、もはや肉眼では確認できない状態になっている。

もう彼が発言（発現）することはないだろう。

「じゃあ、ミスコンなんてどうだ！　可愛い女の子にエントリーしてもらって、健全なる男子生徒の独断と偏見と欲望を含む念入りな審査によって、この学校のミスを決定するっていう……」

……おい、よだれ垂れてるぞ。

寝てるときだけじゃないのか。

「だめよ。この学校から犯罪者を出すわけにはいかないわ」

的を射た突っ込みだと思う。

しかし訳ありのジャックには堪えるのではと思ったが、今の彼はそれどころではないようだ。

その表情だけで、十分逮捕できそうだった。

「あんたたちは、ろくなこと考えないのね。普段からそうなの？……もう、少し時間あげるから良いのだしてよね！」

他力本願で、高飛車な言い方に聞こえるが、さっきミソラちゃんが言っていたように、委員長は自分で出来ることは自分でやっているので、今回は本当に悩んでいるのだろう。

助力を求められた以上、僕たちも本気で応えなければ。

「おい、スバル」
「なんだよ、ロック」

ベルトに装着したハンターＶＧからウォーロックが飛び出してくる。
いきなりのことで、委員長がぎょっとしていたようだが、可愛いかったので、放っておく。

「ちょっくら、ヒカルとコーヴァスのやろうと話してくらぁ」
「お、おい」

そう言った次の瞬間には、テレパシーでも使ったのかと疑うほどタイミングよく現れた、ツカサ君のウィザードであるヒカルとジャックのウィザードであるコーヴァスとともに、ダッシュで端っこの方で悪巧みを始めた。
暗いダークな背景が浮かび上がる。
あの三人の場合、推定ではなく悪巧みと断定できる。

「なんだろうね、一体」
「まったく、悪さしなければいいけど」
「まぁ、その時はまた僕らがなんとかするしかないよ。スバル君」

幼稚園の悪戯っ子をもつお母さんみたいなことを言いながら、僕もツカサ君と何か考える。

ちなみに、もう一人の保護者は今だヘヴン状態だ。

「美女コンはたしかに良い案だと思ったけどね。ジャックがもう少

しちゃんとした言い方をすればよかったのに」
「ツカサ君もなかなかだね。まぁそういう僕も思ってたんだけどさ。あはは」
「じゃあさ、発想を変えて、女装コンテストなんてどうかなぁ」
「女装ぅ？　誰が喜ぶのさ」
「喜ぶかどうかはともかく、面白いじゃん」
「まぁそりゃ、面白いだろうけど」
「それに、僕やスバル君が出ればけっこう盛り上がるんじゃない？」
「……ねぇ、自分を追い込んじゃうの？　他人の不幸を笑うんじゃないの？」

……。

僕はともかく、ツカサ君が出れば盛り上がると思うけどさ。
っていうか、最近のツカサ君、本当に女っ気づいてない？
ヒカルがツカサ君の精神を離れてから、やけに色っぽくなったというか……。
ヒカルが男性ホルモン、ツカサ君が女性ホルモンを司っていたのかも。

ツカサ君は両親に捨てられて、激しい憎悪の中、施設で育った。
そのせいか彼は重度の二重人格を患い、その後電波変換を経て、精神が互いに干渉し合う、別のものとして、一つの肉体の中で確立してしまう。
ヒカルと名付けられた第二人格は巧妙にツカサ君を唆して、ＦＭ星人襲撃事件の片棒を担がせる。
しかし、そのことが逆にツカサ君のヒカルに対する態度を変え、ヒカルを消滅させようと武者修行に出る。

その後のことは、よくわからない。南アメロッパのナンスカ村で会った時は、ヒカルを押さえ込もうとしていたが、帰ってきた時には、何故か、ツカサ君は肉体に、ヒカルはＦＭ星人の残留電波を乗っ取って、完全に独立した個体同士になっていた。

どういうわけかは知らないけれど、彼らが選んだことだし、それなりに仲良くやっているようなので、僕がどうこう言う問題じゃないだろう。

僕が言いたいのは、ツカサ君は下手な女の子よりずっと女の子らしくて、可愛いということだ。

……。

「ねーぇ、二人で何話してるのよぉ。私も混ーぜてっ」

ミソラちゃんが間から僕たちの首に抱きつく形で割り込んでくる。

色んなものが間近に見えたり、良い香りがしたり、触れてたり、けっこうドキドキもんだが、相手にその気はないので平静を装う。

「僕とスバル君は女装コンテストなんてどうかなって」

……。

「……スバル君とツカサ君が仲いいのは友達として嬉しいけど、最近さぁ、なんか変な方向にベクトル向いてない？」

「ミソラちゃん！　ベクトルなんて言葉知ってるのっ！」

「もうっ、馬鹿にしないでよ！」

よしっ。
はぐらかせたぞっ。
また変な話になったら困るからね。

「ミソラちゃんはなんかいいこと思いついた？　勢いづいて飛び込んできたけど」
「へへぇ、なんだと思う？　私にしか出来ないわよ」
「うーん、赤毛のアンとか？」
「なんでよ！　私、あんなにそばかすなんてないわよ」

ほらほら、と鼻の上あたりを指して、自分の容姿についてないことを証明しているつもりで、名作に対して失礼なことを言うミソラちゃん。

注目すべきはそこではない。

僕はそんなつもりで言ったんじゃないからね。

「あれだよね。リサイタルだよね」
「ピンポーン！　私が土管の上に乗って、観客は耳栓して……って、こら、ツカサ君！　当たってるけどちがうわよ。私、がき大将じゃないもの」

あ、ミソラちゃんのライヴか。
それはたしかに人が集まりそうな話だけど……。

「でもそれって事務所的にどうなのかな？　ミソラちゃんって一応活動休止中なわけじゃない。大丈夫かなぁ？」
「大丈夫よ。きっと」

そうかなぁ、あの金にがめついマネージャーがなんか言ってきそうだけど。

「心配ならこうしましょ」

話を盗み聞きしていたのか、委員長が横槍を入れる。

「みんなで軽音楽部に入って、ルナルナ団としてライヴしましょう。面白そうでしょ？」

「はい？」

ルナルナ団って委員長が創った僕たちが属するチームの名前だよね。

チームとは、その名の通り同じ目標を目指す友達の集まりだが、僕らのチームは中学進学とともに散り散りになってしまったので、最近は久しくその存在を意識することはなかった。

はて、僕らがライヴに？

「いいじゃない。ミソラちゃんがボーカルギター、私がキーボード、ツカサ君がベース、ジャックがドラム、で、スバル君がギター。ほら、ピッタリ」

「僕ギターなんてできないよ」

「練習しなさいよ。暇でしょ？　時間あるんだから、ミソラちゃんに教わりなさい」

「そんな付け焼き刃でいいのかよ！」

「うるさいわね。いざとなったら、ミソラちゃんに録音してもらっ

て、あなたはギター持って立ってなさい」
「そこまでして出なけりゃならんのかっ！！」
「当たり前よ。せっかく有名人なんだから。色んな層のファンを獲得したいでしょ」
「お、鬼……」
「はい、じゃあ候補１・ルナルナ団のライヴ」

くそぅ、またしても僕の自由を奪いますか。

……。

それにしても僕以外誰も反対しないところを見ると、演奏できないのは僕だけなのか？
ツカサ君と委員長はなんでも出来そうだけど、まさかジャックまで出来るとはな……、しかもドラム。

凄いなぁ、かっこいいなぁ。

うーん、たしかに好い機会だし練習してみるか。
人生、何事も経験だしね。

……。

「おい、委員長。俺達も提案していいよな」

ロックたちがこちらに寄ってきて挙手する。

「もちろんよ。訊かせて」

それを聞いた瞬間、三人はものの見事に悪役の専売特許である、

不敵で嫌らしくて気持ちの悪い人を小ばかにした笑みを浮かべる。
「委員長、おまえ、本当はわかってるよなぁ？　やるべきことは。いや、やりたいこと」
「……」
ニヤニヤとシマリのない顔つきで委員長に近づき、馴れ馴れしく肩に手を置く。
「思い浮かばないはずがないよな。大好きだもんな」
「……」
「恥ずかしいんだよな？」
クツクツといかにも笑いが堪えられない様子で、変なところで息継ぎをしながら執拗に口撃を加える。
これを保護者として傍観していていいものなのか。
ただ、この先が見てみたいという思いもある。
「少しは自分に素直になったらどうだ？　昔みたいに。生徒会長なんて仮面、捨てちまえよ」
「もう、なによ！」
「いやいや、昔はロックマン様、ロックマン様って追っかけて来たのに、少しは羞恥心がでてきたもんだなぁ。大人になったよ」
恥辱に堪えられなくなったところで、ついに決定的なキーワードを出し、委員長に心理的ダメージを与える。
まぁ、少し前までの、あのミーハーぶりは冷静になってみると恥ずかしいだろうな。
僕は満更でもなかったけど。

……。

しかし端から見ても、えげつないやり方だなぁ。

誰だって馬鹿にされたら嫌だよね。

「愛しのロックマン様に会いたいよな？　そうだよな？　そうなんだな？」

「む、むぅ～」

うわぁ、こりゃレアシーンだよ。

委員長が涙目で耳まで真っ赤にして震えてる。

くっ、周囲の目さえなければ画像に残して、一生の宝にするのに。

非常に惜しいが、ここは網膜に焼き付けるだけで我慢しよう。

……。

ロックも、ロックで汚い手口とはいえ、委員長にこんなことさせられるなんて腕上げたなぁ。

昔は、ウェーブバトル一直線だったのに。

……。

ん、ウェーブバトル？

まさか……。

「そうよ。俺達が集まったら、ウェーブバトルしかないだろ。そうだよな。ロックマン様？」

「ろ、ロック……」

＊

「まぁ、私がロックマン様ラヴとか、ウォーロック消えなさいとか、そういうのはこの際置いておいて、ウェーブバトル大会は考えにあったわよ」
「ロック、消えろってさ」
「スバル、お呼びじゃねぇぞ」

委員長があまりに酷い状況になってしまったので、若干名残惜しい気もしたが、主犯のウォーロックをハンターＶＧへ強制送還することで、なんとか現状の鎮静化を計る。それからミソラちゃんに委員長を慰めてもらって、ようやく話し合いが再開できるような状態になった。

それでも、委員長の目が赤いとか、泣きじゃくる委員長がこの上なく可愛かったとか、ウォーロックが残していった傷痕はなかなか大きかった。

……。

余計な茶々で話し合いが暗礁に乗りかけたが、とりあえず候補２・ウェーブバトル大会。
というか、この様子からではもはや決定事項だろう。

「まぁ、あなたたちにしては頑張ったわね。せっかくだから二つとも採用でいきましょう。……ほら、スバル君。そんな顔しないの。それでルナルナ団のライヴについては、さっき言った通り。特にミソラちゃんを全面的に押していくわよ。ウェーブバトル大会は、そうね。参加者はあなたたち四人、スバル君、ツカサ君、ジャック、ミソラちゃん。文句ないわよね？　試合形式は一対一。武器はあなたたちの標準装備とバトルカードのみ。ただし召喚系カードはなしにしましょう。時間制限は基本的になしにするけど、運営上どうしても時間が足らなくなりそうな時は、私が判定で決めるわ」

……。

これはもう、完全にやる気だったな。

「四人しかいないけど、トーナメントでやるわよ。時間もないし、その方が盛り上がるでしょ」

盛り上がりそうではあるけれど……。

はたして、中学校でそんな古代ローマで栄えていたような殺伐とした見世物をやっていいのだろうか。

「ねぇ、どうやって勝敗つけるわけ？」

「良い質問ね、スバル君。ここはテンカウント制あたりが妥当ね。わかりやすいから。もちろん電波変換が解けた時は負け」

「……」

それって、かなり危険……。

死んじゃう可能性もあるのでは……。

「そんな目で見ないでよ。もしものときは、試合をしてない方が助けに入ればいいでしょう？」

そ、そんなんで安心して良いのか？
……はぁ、もう腹をくくるか。
死なない程度に頑張ろう。
……。
「はいはい、じゃ決定。今日はもう帰っていいわよ。あとは私がなんとかするから。あ、スバル君は練習しときなさいよ、ギター」
みんなは席を立ち、口々に何か話しながら部屋を出ていく。
僕はその最後尾について、ドアを閉めようと手をかけたとき、不意に立ち止まって、委員長の方を見る。
……。

「委員長。さっきはごめんね」
「いいわよ、慣れてるもの。これまでに何回ウォーロックに泣かされたと思ってるの」
「……そうだね」
「……」
「委員長。僕、ウェーブバトル、頑張るからさ。期待してて」
「当然でしょ。あと、あなたじゃなくて、ロックマン様が頑張るのよ」
「そうかもね。……じゃ、また」
「……うん」

文化祭、といえば？　０５

……。

……。

「ルナルナ団でした！　どうもっ、ありがとうっ！！」

……。

……。

「みんなーっ！　この後のウェーブバトル大会も楽しんでいってねーっ！　よろしく！！」

……。

……。

「……」

「大成功だね、スバル君っ！　……スバル君？　もう終わったよ？　なんで固まってるの？」

「……はっ！」

あ、あれ？　もう終わったの？

い、いや、それよりもいつ始まったんだ？

僕の記憶は、みんなで生徒会長室で文化祭について会議している

ところでノイズってるんだが？
僕はタイムスリップでもしたというのか？

「み、ミソラちゃん？　僕は一体今までどうしてたんだ？」
「うん！　スバル君、すっごい上手だった！！　練習じゃあんなんだったたのに、やっぱり本番に強いんだねっ！」

久しぶりの舞台で気分が高揚してるのか、ミソラちゃんは僕の質問の意図を上手く汲み取ってくれない。
いや、でも普通に時を過ごしてきた人に、僕は過去から来たタイムトラベラーです、なんて言ったって信じてもらえないのは当然か。
しかも、話しぶりから僕の知らない僕と共にしているようだから、この場合落ち度があるのは僕の方だ。

……どうやら、あまりの緊張感と集中力で外界との関係を完全に断ち切っていたようだ。
プチ記憶喪失って感じだろう。
少ししたら時機に戻ってくるはずだ。

……。

「それよりスバル君！　今は次のウェーブバトル大会に意識の先を向けなきゃダメだよっ！！」

ミソラちゃんは興奮した様子で、バシバシ叩いてくる。
何も知らない人にとって、これ以上ないくらいわかりにくいテンションだ。

とりあえずお返しとばかりに、叩き返しておく。
僕にはそれくらいのことしかできないのだ。

「キャッ、どこ触ってるのよぉっ！　エッチ！！」
「あ、いや……」
「もぉ……。でも一回戦でお互い別々だし、決勝で私に勝つことができたら考えてあげるわよっ！」
……。
……なんのこっちゃ。

＊

緊張が若干薄れたからか、それともミソラちゃんから大まかな流れを説明してもらったからか、徐々に記憶が復帰して、今の状況も把握した。

僕はあれからの短い期間、ミソラちゃんのスパルタ教育の下、普通のギターリストに比べたら一夜漬けみたいな練習で、とりあえず弾けるような段階にまで技術を向上させた。
ミソラちゃんが零した冗談めかした本音を聞くところ、僕の微々たる上達は、それでもかなり遅かったらしい。
昨日のリハーサルもまともに聴けたものではなかったそうだ。
要するに才能がない、とのこと。
ふんっ、だ。

それで、今日の演奏会だ。ここの記憶は完全に消滅しているわけだが、ミソラちゃんの直後のお褒めの言葉通り、これがなんと奇跡のノーミスクリア。

まぁ、昨日のお粗末なリハーサルを見て、急遽、もともと簡単だったパートをさらに簡単にしてもらったおかげなんだろうけど。

その分、ミソラちゃんには迷惑かけたみたいです。

歌いながら高速で弾いていたとか。

はい、素直にごめんなさい。

謝ったところで、終わったことについていつまでも言っていてもしょうがないから、まとめよう。

僕は受験だけじゃなくて、音楽もナメていたようです。

今後一切安請け合いはしません。

んんっ、それで次に控えるは今回の文化祭における最大のイベント、ウェーブバトル大会。

大々的に広告しただけあって、まだ開始３０分前だというのに、会場のグラウンドは超満員だ。

人口密度は一平方メートル当たり四、五人とけっこうな混み合いに見える。

電波社会が急激に発展している現在でも、電波人間のみによる大会はまだまだ稀有だからね。

みんな興味津々ってことだろう。

……あぁ、そう考えるとまた緊張してきちゃった。
もう一回、トイレ行ってこよっ。

……。

しかしそのおかげで、委員長の思惑通り、各クラスの出し物もなかなかの盛況のようだ。
このままならこの学校の文化祭が始まって以来の巨万の富がなだれ込んでくることになりそうだ。

お金のことはさておき、僕らはそれだけの観衆の期待に応えるパフォーマンスをしなければならないわけで、比例してプレッシャーも高まっていく。
どれくらいかと言うと、一人当たり毎分7パスカルぐらい。

……よくわからん。

ともかく、気の小さい僕は言うまでもなく、冷静な委員長やムードメーカーのツカサ君でさえも、表情がぎこちない。
ミソラちゃんだけは場慣れしているというか、さすがは能天き……んん、芸能人と言えるだろう。

……。

それで大事な初戦だが、僕の相手はツカサ君だ。
彼とは敵味方問わず幾度となく戦いを共にしてきたのでよくわか

るが、彼は相当なくせ者である。

そもそも戦法自体が、ツカサ君本人とウィザードであるヒカルの二人のコンビネーションから為されるものだから、常に二対一なのだ。

それだけで十分ずるい気がするのに、そこにさらに、ツカサ君の優秀な頭脳が加わって、無駄のない連続攻撃が繰り出されるわけで……本当、こちらとしては打つ手がない。

どうしようか……。

……。

よしっ、出たとこ勝負で。

……。

その組み合わせは委員長の独断をもって、決定させられたようで、僕はそれを委員長本人から聞かされた。

「スバル君の初戦はツカサ君だからね。なんでかわかる？」

「さぁ、あみだくじ？」

「決勝戦はあなたとミソラちゃんにやってもらわなきゃ困るのよ。ツカサ君とジャックでも、たしかにそれなりに絵になるけど、一般

のお客様からしたら知らない人。盛り上がるはずがないでしょう？
有名人同士になってもらわないと意味がないのよ」

……や、八百長きたぁーっ！？
たかが中学生の遊びみたいなものに、どこまで裏をつくる気なんだよ！

「このことはツカサ君やジャックには内緒よ。お客様にだって失礼になるから。だから本気でやって勝ってもらわなければいけないわ。……ロックマン様にだったら簡単よね？」

よかったぁ……。
委員長にも、まだ善悪を区別できる心が残っていたか。

政治家志向の彼女ならやっても不思議じゃないからね。

「問題はミソラちゃんなのよ。彼女、客観的に言って、四人の中では一番頼りないでしょう？　だから、実力の近いジャックの方をあてたんだけど……」
「正直ツカサ君は群を抜いて強いものね。タイマン勝負であの二対一戦法は反則だよ。僕も勝てるかわからないからね？」
「そうなのよ……。ロックマン様が負けちゃうなんて、私、堪えられないわ……って、そうじゃなくて、ミソラちゃんが心配だからどうしようって話！」
「そこは頑張ってもらうしかないよ」

そんな具合。
この大会は委員長の私情に始まり、私情で終わらせるつもりらし

い。

そろそろ時間が迫ってきて、委員長から召集の命が下り、校舎前に建てられた仮設ステージの裏に集まる。

来る途中で群集の一部に発見され、主にミソラちゃんへの黄色い歓声があがる。

そのとき、ちらりと目に入ったが、一応僕やツカサ君やジャックの応援もいるようだ。

当然だが、ツカサ君やジャックのファンのほとんどが学校の生徒である。

見る限り、二人の人気はなかなかのもののようだ。

二人とも全く違うタイプだけど、それぞれイケメンだもんね。

……。

「さぁ、始めるわよ。みんな、準備はいい？」

五人で小さな円形をつくって、真ん中で手を重ね合う。

委員長が落ち着いた声で鼓舞するように言うが、その手は僕らの中心で震えている。

この文化祭を、委員長の願いを叶える形で成功させるには、僕とミソラちゃんが決勝戦で対決し、僕が勝利を収めなければならない。

かなりきつい道のりになりそうだが、僕はやらなければならない。

……。

……。

「いくわよ……。せーの、えいえいおーっ！」

仮設ステージの階段を一歩一歩つまずかないように気をつけて上がる。

観客の高まる歓声で、僕たちはもうマイクなしでは会話できない。

それでも迷うことなく、決められた位置へと足を進める。

周りのものは気にならなくなっていた。

僕らの頭上には同じ青空が、ただ、広がっているだけだ。

文化祭、といえば？　０６

仮設ステージで自己紹介をし、目の前で一人一人電波変換してみせるというなかなか面白い演出をした後、すぐに、グラウンドの上空に意図的に張り巡らされたウェーブロードで、僕とツカサ君の電波変換した姿、ロックマンとジェミニ・スパーク・ブラック＆ホワイトが少し離れて相対する。

下で見守る観客によく見えるように、電波周波数域を自在に操って戦うウェーブバトルにおいてはある種の制限となるのだが、僕たちはもちろん可視電波周波数域でいる。さらに巨大ディスプレイとわかりやすい委員長の実況付きだ。

今下では、電波変換の事前知識みたいなものを委員長が簡単に説明している。

その一部を受信して、僕なり解釈してみると、電波変換というものは、人間と人間を電波人間たらしめる媒介の電波生命体が必要となる。電波生命体は、ロックのように電波の身体をもつ宇宙人だったり、数は少ないが人工的に造られた高度な電波体、所謂ウィザードだったり、とにかく人間を電波化できる程の高濃度の電波を発生させられればいいのだと思う。

難しい理論は科学者に任せるとして。

電波人間となった者は、時に電波ウィルスや他の電波人間と戦うことになることもある。そのとき、彼らは己の武器、主に媒介となる電波体の恰好や好みによって電波変換したときに決められた標準

装備と、ハンターＶＧを通してウィルス対策のバトルカードを中心に攻撃を組み立る。さらにそこに電波周波数域を変化させることで、移動速度に緩急をつけたり、僕とロックの得意技であるウォーロックアタックのように、敵に急接近して懐に飛び込んだり、作戦を組み立てていく。

ところで、標準装備のくだりで電波体の好き好きで電波人間の装備が決まると言ったが、他にも外見や攻撃の属性みたいなのも、元の電波体所以だったりする。

僕が世間で青き流星と呼ばれるのはロックの身体が青いおかげで、僕がノーマル属性なのはロックが無能なせいである。

……。

「おい！　まだ始まんねぇのか！？」

心中察したように、ロックが僕の身体から飛び出してきた。

委員長の前置きが長いのにいらいらしているのか、早く暴れさせろと言わんばかりに、その場で左右に激しく揺れ始めたかと思ったら、ボクサーのようにシャドーボクシングを、って！

うわっ、ついに僕を攻撃し始めやがった！

……ふっ！

はっ！

……。

キリッ、今だ！！

「でやぁぁぁっ！」

顔を狙った右ストレートを躱しながら、力を受け流すように受け止めて、ロックの身体を引き込んで、肩を軸に投げ飛ばす。

「ぬおっ！！」

ふははは、どうだ！　自分の力によって投げ飛ばされた気分は。きみが、ロックマン時の僕に勝てないのは誰もが知るところぞ！

『なにやってんのよ、スバル君！　お客様がざわめきたってるでしょう！　もう始まるから静かにしてなさい』

僕たち参加者の間で常時情報のやり取りができるように、事前に設けられたハンターＶＧのオープン回線（当然、対戦者同士のやり取りはない）から、委員長がわざわざ突っ込んでくれる。

……。

よしっ。

緊張も解れたところで、一気に始めましょうか！

＊

「で、今日はどんな作戦でいくんだ？」

委員長の合図で戦いの火ぶたが切って落とされてから少し、今のところ、向こうの動きはなく、無策の僕はどうしようもない。

慎重派のツカサ君もそうとは知らず、こちらの出方を伺っているのかもしれない。

「初めのうちは向こうの動きに合わせて、隙を狙っていく」

「出たっ！　スバル様お得意の出端を挫こう作戦！」

僕とロックは互いに無策という点で方向性は同じだが、その中で僕は慎重派、ロックはガンガンいこうぜ派と相入れないものに派生し、昔から作戦行動において根本的な違いがあり、よく勝手に飛び出していって邪魔されることがあるのだが、今日は先の屈辱があるためか、逆らわないで素直に従ってくれそうだ。

っと、今はそれより二人に注意していないと。

えーと、ホワイトがツカサ君で、ブラックがヒカルだったよな。
ホワイトは左腕、ブラックは右腕にそれぞれスタンナックルと呼ばれる電気を発生させる黄色い出力機構があり、二人は主にこれを使って攻撃をする。その用途は様々で、単純に指先から電撃を放ったり、エレキソードに変化させたり、また、二人がその腕を重ね合わせることで、まるで雷のような強力な電撃、ジェミニサンダーを繰り出す。もちろん、バトルカードもインストールできる。

基本的に全ての攻撃が電気属性なので、必然的に麻痺効果が付与され、喰らったら連続攻撃は避けられない。たとえジェミニサンダーのような大技を堪え切っても、追撃に沈むという寸法だ。

……はぁ、ほんと、厄介な敵だよ。

「攻撃方法は？　近接か？　遠距離か？」

相変わらずロックが無神経にも、脇でギャーギャー喚いている。作戦に逆らわないとなると、今度は内容を詳しく説明しろと騒ぎ立てるのだから、始末に負えない。

……ちょっと黙っててくれ！
作戦なんかなくって、本当に向こう次第なんだよ！
馬鹿にされるから言わないけどっ！

「わからない」
「奴ら電気属性の弱点である木属性でいくのはどうだ？　タイボクザンみたいな」
「いや、ツカサ君やヒカルがその程度の対策を講じていないとは思

えない」
「じゃあ、ファンサービスも兼ねて、ド迫力なギャラクシーアドバンスごり押し戦法」
「反動がデカいからヤダ」
「じゃあ、いっそのこと、この前映画で一緒にみた、チョイナ拳法を実戦にうつしてみるってのは……」
「できない」
「ないない尽くしじゃ何も始まらないだろう！？」
「ちょ、うるさいっ！　少し黙って……あっ！」

白も黒もいない！
しまった、ウォーロックのバかのせいで……。

いかんっ。
いつまでもここで止まってるのはまずい。

ロックが喜々として素早く中に戻ったのところで、未だ影を踏めていないので、とりあえず闇雲に走り出すと、今まさに立っていた場所に、天から雷が落ちた。ウェーブロードに激しいノイズが走る。

すぐさま上方を確認するが、すでに姿はない。

「いきなり大技かよ……」

くそ、なんて威力だ。
死角からジェミニサンダーなんて無茶苦茶だ！
見つける前に消し炭になっちゃうよっ！

「ロック！　きみが悪いんだ、探せっ！」
「無理だ。どこもかしこも可視電波だらけで同じにしか感じられねぇ。委員長に訊け」
『ずるはだめ』
「わかってるわ！」

ウォーロックレーダーッ！！
少しはまともな働きしろよっ！

言ってる間にも数発の電撃が身体を掠めえぇぇぇっ！　って、今のはマジで危なかったぁ……。

僕は姿を捉えられないでいるが、電撃が発射されるたびに観客の歓声があがるので、まったく消えてしまったというわけではないだろう。
少なくとも前に現れないということがわかっただけでも十分だ。

考えながらも、ウェーブロードを駆け抜け、気まぐれに方向転換し、気配がしたら左右に飛び退いたりバク転してみたり、回避行動を続ける。

このままじゃ、埒が明かないし、いつ電撃に搦め捕られるかもわからない。
どうするべきか……。

……。

……わっ！

……。

お願いしてみるか……。

「ウォーロックっ！　バリア張ったら、出ろ！　僕ときみで背中合わせにっと、危ない……。背中合わせになって、敵を探すぞ！」

「マジか！　俺が打ち落とされたら終わりだぞ？」

「このまま僕が落とされるよりマシだろ。……さぁ、今だ！」

バリアを展開して、飛び出したロックと背中合わせになって辺りを見回す。

耐えて三発。

その間に見つけないと……。

ぐっ、いち……。

に……。

やばい……。

……。

もうだめか……。

はやかったなぁ……。

「いた！　後方仰角３０度！」

ナイス！

ロックは声を出しながら、僕の下に戻る。

振り向いて、ロックオンサイトが敵影を捉えるのとほぼ同時に電撃がバリアを貫き、頬を掠めて遥か後方に飛び去る。

……。

ひゃー、冷や汗だらだら。

こんな死と隣り合わせの状況は二度とごめんだ。

でもま、とりあえず落ちる前に見つけられてよかった。

「見つかちゃったね、ヒカル」

「遊びは終わりだな」

……遊び、ですか。

……。

とにかくこれでスタート地点に戻った。

反撃開始ぃ！

＊　＊

死角からジェミニサンダーを連発されるよりは、当然、二人に真っ向から向かってきてもらった方がこちらとしては迎撃しやすいだろう、と楽観的な考えから意気揚々として反撃開始なんてカッコつけたことを口に出したりしてたんだけど……。

当てが外れた。

「スバルスバル！　左右同時にくるぞっ！」
「了解っ！　回避するぅぅうわあぁぁぁっっ！」
「おいっ！　休んでる暇はないぞ！　上だ、って言ってる間に左からもっ！！」
「どうしろと！？　えぇい、ままよ！　パワーボム！！」
「この距離じゃ自爆と同じだ、って！？　あぁ！」

ぐぬうぅぅぁっ！

……。

はふぅ……。

いやぁ、参った。

まさか、二人の連携がここまでとは思いもしませんって。
これはまた、短期間でとんでもなく腕をあげたもんだ。

二人の可視電波周波数域に馴れてきたのかウォーロックレーダーが少しは役に立っているから、今はなんとか対応できているが、正直、一つ見落としたら、やられる。

現実に、何もしてないのに、万策尽きた感じになるなんてことがあろうか。
いや、策がないだけだ。

二人は散開して、僕と付かず離れずの微妙な距離を保ちながら、いやらしく移動を阻むように電撃で攻撃し、隙をみつけてこちらが一方に照準を合わせると、他方が死角から接近してエレキソードで邪魔するように一撃離脱していく。それならばと僕から接近戦に持ち込むため近づくと、頃合いまで引き付けられてジェミニサンダーを放たれる。

さっきからその繰り返し。

あーもう……、これ詰みだわ。

……。

まぁそう捨て身にならずに、って自分の中の強気な自分に励まされつつ、今はさっきやけくそになって投げたパワーボムの爆煙に紛れて、一息ついてるんだけど、あぁ、その煙幕もそろそろ晴れそうだ……。

とにかく、あの進路妨害の電撃にいつ搦め捕られるかわからない今は、どうにか接近戦に持ち込んでなんとかするしかない。

……接近戦にしたって不安要素しかないけど、今よりはマシだ……そう思う。

……。

よし、とりあえず、左腕をバルカンにしてっと。

「ロック。敵の位置は？」

「正面と直上だな。ご丁寧に煙が晴れるまで待ってくれるって感じだな」

「よし、ならこちらも晴れるまで待って、向こうの攻撃を避けつつ、こいつで攻撃だ」

「でもさっきからそれやろうとしては、邪魔されてたよな？」

「いいんだよ。これは囮で一撃離脱の方を狙うから」

「ふーん……おっ、晴れるぜ」

シルエットだった二人の姿が徐々に露わになっていく。

ふむ……、前がブラックで、上がホワイトか。

「よし、いくぞ」

二人の手元が一瞬煌めく。

咄嗟に薄くなった煙の流れを乱して、飛び出した。

背後に十字砲火の音を聞きつつ、互い違いに走るウェーブロードを適当に移動しながら、バルカンの照準をそれから逃れようと動き回るホワイトに重ねる。

わざとロックオンに手間取っている、なかなか撃つ瞬間をつかめないでいらいらしているように見せつけ、相手の突撃を誘引する。

さぁ、来い、ブラック！

絶好のチャンスだぞ！

……。

いや、あの、来てくれないと、けっこう困るんですが……。

……。

よしっ、来た！

ブラックがエレキソードを手に軌道をこちらへ向けるのを確認して、厄介なホワイトを釘付けにするために牽制射撃を行いつつ、内々に格闘戦の準備をし、悟られないよう気をつけて構える。

チャンスは一回。
流れを変えるにはここしかない。

だが、もちろんリスクも大きい。
失敗したら、死ぬ。
……それは、間違いない。

……。

「ヒャァァホオォォウウッッっ！　脇ががら空きだぜ！　殺すぞっ！！」

……あれ？　冗談なのに冗談にならなそうな雰囲気。

……冷や汗。

鬼の形相で迫るブラックに戦々恐々としながら、彼がエレキソードを振りかぶるのを横目に見、牽制射撃で遥か後方まで退いてくれたホワイトから僅かな希望を見出だして、左腕をバルカンから普通の腕に戻す。
すばやくブラックの方に向き直って……。

……。

勝負ッ！

「うらあぁぁぁっっ！！」

身体を真っ二つにせんとばかりに、勢いよく振り落とされる。

怖い……けどいまさら逃げられん！

「ぬおおぉぉぉっ！」

「ッ！？」

エレキソードの刀身を頭の僅かに手前で、拍手の要領で捕らえる。

「……チッ！　シラハドリ、か！」

……はぁ、はぁ、上手くいったぁ！

しかし、けっこうビリビリするなぁ。

傷さえ付けられなきゃ大丈夫だと思ってたけど、……それに思ってた以上にブラックの力も強い。こりゃ早いところ済まそう。

「ふぬうううぅぅん！！」

「なぁ！？」

重ねた手を力いっぱい横倒しにすると、軽快な音を立ててエレキソードが根本から折れる。

慌てるブラックを逃がさないように、すぐさま折ったエレキソードを彼の胸元に突き立て麻痺させ、そのまま追撃を加える。

のけ反った腹部に右ストレート。くの字になったところをアッパーで直立させ、その勢いのまま脚で顎を蹴り上げて一回転。上空に飛んで、追い付いて、脳天に踵落とし。

墜落するブラックをバスターで狙おうとするも、射線上にホワイトが割って入り、電撃でもってそれを阻止する。

ブラックには大分ダメージを与えただろうから、ここで一端引き下がってもいいが……、いや、せっかく一対一に持ち込めたんだから、ここはやっぱり畳み掛けよう。

ホワイトが弾幕の如く乱射する電撃を、掻い潜って、ときにバスターで相殺して、なんとか接近する。

ホワイトは下にブラックが倒れている都合、そこから動くことができない。

流れ弾すら許されないのだから、攻撃を全て処理しながら、僕を退かせるしかない。

精神的に僕のが優位に立っている。

バスターを残して右手にソードを装備する。
目前に迫ったホワイトの距離的に最後の迎撃を身体を捻って躱す。
ソードを掬うように振るが、身体を屈めることで避けられ、エレキソードを構えて、反撃される。
ソードとエレキソードが甲高い音で交わり、鍔迫り合いが始まるように見せかけて、携帯したままのバスターを突き付けて放つ。
が、ホワイトは予想していたかのような動き――身体をソードの交点に関して回転させて、背後に回り込むと、素早く左腕を戻して僕の首元に這わせる。
僕は腕を地上で未だ麻痺効果で倒れているブラックに照準を合わせ、バスターにエネルギーをチャージして、対抗する。
一方的に付け入る隙を与えるわけにはいかない。
ホワイトは僕の首を一瞬のうちに撥ねられるが、その一瞬でブラックを撃ち抜いてやる。
これで迂闊に手は出せないはずだ。
「さすが、ロックマン。ブラックがあんなになるなんて、初めてかもしれない」
「ホワイトこそ、簡単に僕の首を取るなんて、悔しいよ」
「嘘だね。本当はそんなこと思ってないくせに。まだ負けてないって気迫の電波が伝わってくるよ」
「ま、そりゃ、ブラックの生殺与奪は僕にかかっているわけだからね」
「ロックマンのは僕が持ってるけどね」
「できるかな……ッ！？」

眼球を限界まで下に向けて、動きを見ていたソードが突如として消え……！

「――できるよっ！！」

「が！」

ああぁぁぁぁっ！？

声にならない悲鳴がどこかに響く。

ぐぁっ、な、なんだ、この加速度はっ！

ち、どんどんホワイトが遠ざかって、ってあぁ！　ちくしょう、ロケットナックルか！！

首を握り絞めるホワイトの左腕を地面に衝突する直前で振りほどくと、上では、回復したブラックがホワイトと合流しようとしていた。

完全に射程距離から逸脱していたが、悔し紛れに二人の合流ポイントを狙って溜め続けていたエネルギーを解放する。

視界全体を眩しい光が包んで、次に見えたときには、光線は二人の間の虚空を切り裂いて、空の星となっていた。

＊　＊　＊

極太レーザーによって散開した二人は、再び落ち合うことはしないで、そのまま、僕の頭上遥か高くを旋回し始めた。

「なんだなんだ？　何してんだよ、ありゃ」

あまりに奇怪な光景にウォーロックが飛び出してきた。

まぁ、たしかにそれも気になるけど、今はそれよりも。

「ねぇ、ロック。電波人間が電波化を維持するのに、必要なものって何だっけ？」

「あん？　なんだよ、今、関係ねぇじゃん」

「いいから、早く」

「そうだな……。挙げるとすりゃ、人間の体力と媒介となる電波体の安否だろ」

「だよね。だから、普通ロックみたいに人間の身体の中に隠れてるんだよね」

「そりゃそうだろうよ。電波融合して出来てんだから、双方が共に無事である必要があんだよ。地球では思ったほど力の出せない俺らは中にいるしかあるめぇ。暴れたいけどよ。……で、それがなんなんだ？」

「なんだ、まだわかんないのかよ。じゃあさ、あの二人の場合、どっちがどーっちだ」

「あん？　ツカサが人間で、ヒカルがウィザー……あっ！」

「それそれ。彼らの場合、二人とも戦場に立っちゃってるんだよ。もともとはジェミニっていう宇宙人が中に隠れて、電波化を維持さ

せていたのに、彼らは精神を分離させるにあたって、ジェミニの身体を乗っ取って、ヒカルに電波化の能力を委ねてしまったんだ」
「そんじゃ、弱点を剥き出しにしてるわけだな！」
「二対一戦法はメリットもあるけど、より大きなデメリットが浮き出てるってことだね」
「よし、それならヒカルを落とせば勝ちか！」
「そうだ！」

そう考えるなら、さっきホワイトがブラックの前に立ちはだかって、一歩も退かない姿勢で必死になっていたのも頷ける。
もしもブラックがどうでもいいなら、囮にでもして、また陰から急襲すればよかったんだ。

……いや、それはいくらなんでも、酷いな。
僕だったらやらない。ってことは、ツカサ君もやらないだろう。

とは言え、差し違えてでも守ろうとした裏には何かあるはずだ。
この考えに賭けてみるだけの価値はある。
どうせ他に策もないのだし、ここにきてようやくできた策らしい策に従ってみるのも面白そうだ。

……。

さぁ、次は現状把握だ。

上空を旋回していた二人は、いつの間にかそれをやめて、少し離れて位置し、何やら黒い暗雲を足元に纏い、背後に輪形に連ねた小

太鼓を背負って、手には棒状の……バチらしきものを持っている。

……あれは、新技か？

「それにしても……」

「ありゃ、どう見ても雷神だよなぁ」

珍しく僕とロックの意見が合う。

あれで虎柄のパンツを穿いていたらまさしくだよなぁ。

「なんだろう。ちょっとやばそうだね」

「ちょっと、か？　空気がピリピリしてるぜ」

そう言われてみれば、僕の髪型がいつもよりツンツンしているような気がするぞ。

とりあえず、何も起こっていないうちに動きだしますか。

土を蹴って跳躍し、若干の距離を残して二人に近づく。

危ないと思うけど、友達だし、いきなり新技繰り出すわけもないよね。

戦場に友情が通用すればだけどね。

「ロックマン……。さっきはよくもやってくれたな……」

よし、逃げよう。

ここは戦場だ。

友情だ、なんだ、言ってたら命がいくつあっても足りやしない。

「待てよ、こら……。今、あの世に送っ……」

声ちっさーっ！？

あのヒカルがこんだけ静かだなんて、こりゃ、なんかとんでもないものを内に溜め込んでいるにちがいない。

どうしよう、どうして逃げるか。

バリアじゃ到底無理そうだし、初期装備のシールドじゃ以っての外だし……。

「フォーミングサンダーッ！！」

うおおぉぉぉァッ！？

ちょ、まだ考えが、って、言ってる間もない！？

雷鳴と太鼓の音が入り交じった大気を揺るがすような轟音より少し速く、輪形に連なった小太鼓の内側から無数の小さな雷が発生し、目にも留まらぬ速度で迫る。

これはいくら電波人間でも避けられない。
特に周波数を限定されている今では尚更だ。

避けるんじゃなくて迎撃するしかない。

でも……どうやって。

雷、電気、対になる属性は木。

電撃の威力を圧殺できるような木属性で強力なカードは……。

……。

できるか……？

「コガラシッ！」

左腕をバスターから特殊な扇風機に変えて、前方に小さな木葉の竜巻を巻き起こす。
正面からくる雷撃はこれで次々と木葉に相殺されていく。

よしっ、これならいけ……あぁ！？

なんで、竜巻、迂回して、こっちくんの！？

くそっ、まだ間に合うか！

あ。

＊　＊＊　＊

「あああああぁぁぁアアアアアッ、あ、……あ」

雷が次々と身体に突き刺さって、麻痺して、内からも外からも、チクチクチクチク、されてるみたいに、動けないし、ウゴキタクナイ。

怒りに狂ったブラックが、ホワイトの制止、フリキッテ、ぼくに、迫って、殴る蹴るの暴行を、電撃、ヤダ、イタイ、シニタイ。

モウ、だめぽ……。

「委員長、ごめん……」

意識、トブ。

＊　＊　＊　＊　＊

「ヘンゲノジュツ、だってぇ！？」

ブラックがヌッキーに夢中になってるうちに、ホワイトの背後に回って、彼が気付くよりも速く、ソードで切り付ける。さっきのように麻痺効果はないが、バトルカードのヘンゲノジュツの効果で木属性になっているから、わりとダメージは大きいはずだ。

証拠に、ホワイトの背中の刀傷からは身体を構成する電波情報が溢れ出ている。

このままならホワイトを戦闘不能にするのもいけそうな気がするが、あまり調子に乗らないでここは当初の作戦通りに行くとしよう。

向き直って、臨戦態勢を取ろうとするホワイトは、攻撃を受けた影響でやはり隙が大きく、そこを狙って、蹴り飛ばし、さらにパワーボムを取り出して、爆風を使って距離を増やす。

パワーボムの音で、ブラックがようやく異変に気付いた。

ブラックに突撃する。

ホワイトが即座に反転するのが視界の隅に映る。

「ロック、向こうは手負いだ！　暴れてこい！」

「おぅよ！」

邪魔なホワイトの迎撃にロックを向かわせ、時間を稼ぐ。

あとはブラックが逃げなければ……。

「ロックマン！！」

僕の勝ちだ！

ブラックが迫る。

左手にバスター、右手にソード。

向こうはスタンナックルのみ。

間合いに入る僅か手前で、向こうが指先から電撃を放つ。

身体を転がすようにして躱す。

回転の勢いに乗せて、垂直にに振り下ろす。

「ふぬっ！」

……まさかのシラハドリ。

やられてわかったが、これ、けっこう悔しい。

……。

当て付けのように合わせた手を倒してソードを折ろうとするが、身体を力と同じ方向に回転させる。

僕と一緒にブラックも一回転。

咄嗟の機転がきかなかったらしく、折れない。

慌てている間に、バスターで殴る。

ソードから手は離れない。

もう一度殴ろうとすると、ソードを諦めて、スタンナックルの方でバスターを受け止める。

それでいい。

「吹き飛べっ！」

零距離からのバスター、名付けて零距離バスターによってスタンナックルは粉々に弾け飛ぶ。

愕然とするブラックを他所に、断面からはとめどなく情報が流出する。

敵が攻撃の軸となる武器を失った今、完全に勝敗は決まった。

ソードを首に宛がって。

委員長……。

「僕の勝ちだ」

「く、そっ……」

＊＊　＊＊　＊＊

ん、んん？
あっれぇ？

何、この浮遊感。
気持ちわるっ。

勝利で、気分が昂揚してるってのとは違うよな？
だいたい、ヒカルの首の手応えとか、全然なかったし。

夢オチ？

いやいや、まさか。

……おぉ、いつの間にか、視界一杯に広がる青空。
太陽が眩しい。

僕は今、まさに世界を感じているのだ。

……。

高まる緊張感。

ごまかし切れない焦燥感。

リアルにやばい浮遊感。

「スバル君っ！」

久しぶりにミソラちゃんの生声が聞こえたと思ったら、全然優しくない胸に受け止められる。

「だいじょうぶ？」

大観衆が見ている中、ミソラちゃんことハープ・ノートに逆お姫様抱っこをされるのは、あまり大丈夫な状況ではない。

まぁ、それがなくても、だけど。

ハープ・ノートの腕の中で、もう一度空を見上げる。

自然な青に、ある一点。

不自然な青。

目を凝らす。

吊り上げにされたウォーロック。

あぁ、僕は負けちゃったのか。

事件、といえば？　０１

僕とツカサ君の試合が終わって、今は次のミソラちゃんとジャックの試合を待つ休憩時間。
その間、僕は委員長や待機選手がいるはずのステージへは戻らず、会場にいたゴン太と隅で話をすることにした。

負けちゃったからね。
委員長は、きっと怒ってるかがっかりしてるだろうから顔を合わせづらいんだよ。

それにゴン太と会うのも久しぶりだ。
ちょっとくらいなら文句は言われないだろう。

「なんでそれに気付いてて、ロックに迎撃させたんだよ」
「だってさぁ、思いの外はやくホワイトが戦線に復帰しそうだったし、ロックに暴れる機会与えたかったんだもん。しょうがないだろう？」

僕の敗因は、電波変換の要であるウォーロックを落とされたことにある。
僕がしようとしていたことを、ツカサ君が先にしたのだ。

なんで電波人間の弱点と知りつつ、自らのウィザードに迎撃させたかって言うと、いや……もう少しさぁ頑張ってよ。ホワイトもボ

ロボロだったんだし、ロックがなんとかしてくれる、っていうか、勝つとは最初から思ってなかったけど、普通負けないと思うじゃない？　けっこう短い時間だったし、普段からあんなに偉そうなこと言ってるんだからさ。ＦＭ星並とまではいかないけど、地球だって、きみたちのおかげで、飛躍的な電波革新が起きてるんだぜ？　きみが初めて来た頃の地球、僕のトランサーに逃げ込んだ頃とは比べものにならないくらいにね。そろそろ、力が足りねぇ、なんて言い訳は通用しないんじゃないかな。

……。

まぁ、今回の敗因は、僕がロック君の力を過信していた、そういうことでいいんだね？

僕は全然構わないけど。

……。

「おまえってなんだかんだ、ロックのことちゃんと考えてあげてるよな」

「いやいや。そうでもしないといつ犯罪に手を染めるかわからないからね」

……。

しかし、いまさら愚痴ってもしょうがない。なにより本当に僕が悪いんだ。あそこはロックを使わずに、もっと何か良い方法で対処するべきだったんだ。

その点で、距離のかさ増しに使ったパワーボムは惜しかった。もう少しホワイトの懐近くで爆発してくれれば、ダメージを与えなが

ら、さらに距離が増えたはずだ。

それ以上に、僕がもっと早くブラックを落としていたら、何の問題もなく、今の僕とツカサ君の立場は逆だった。

……。

……はぁ、終わってから、たら、れば、言っててもしょうがないな。

負けは負け、だ。

死ななくてよかったじゃないか。

……これから死ぬかもしれないけど。

……。

……怖いよぉ、委員長！

「犯罪はさすがになぁ、シャレにならんよ。この前な、俺とオックスで牛丼屋に行ったんだけど……」

牛島ゴン太はコダマ小時代のルナルナ団メンバーで、当時は委員長の右腕と呼ばれた男だ。

図体がでかく、腕は僕の太ももくらいあって、とにかく暴れん坊だったこともあり、昔は友達に恵まれていなかったそうだ。何かのきっかけで委員長に拾われて、彼女の厳しい教育の後、用心棒の役

職を授けられると、誰彼構わず暴力を振るうことはなくなったようだ。荒っぽい性格が薄くなったおかげで、もともとその影に隠し持っていた天性のボケキャラが前面に出て……というか単にバカが露呈して、すっかりクラスの道化師として定着したらしい。

うーん、しかし、僕としてはあまり信じられた話ではない。

僕の人生の暗黒時代の話だし、ゴン太と初対面したとき、委員長も一緒だったけど、いきなり胸倉掴まれて殴られそうになったからね。

どうも上手く脚色されてるような、意図的に美化されたような気がするんだよ。

僕の予想では、これも委員長伝説の一つだ。

……。

ところで、そのゴン太だが、ＦＭ星人の地球侵略を契機に、オックスという燃え盛る炎に身を包んだ闘牛型電波体に度重なる強制電波変換、つまり精神までも乗っ取られて否応なく戦わされることになる。何度目だったか、たしか僕たちがスキーに行ったときに、一目惚れした女の子に愛の告白をしようと頑張っていたところを、オックスに襲われて電波変換し、僕と戦いながら、心の中で彼とオックスの間に謎の友情が芽生え、戦いが終わった頃には、ゴン太のウィザードとしてオックスが成り上がっていた。

そんな難しい成り立ちのコンビだが、周波数があっているというか、性格が似ていることもあって、上手くやっているようだ。

ゴン太の影響で、オックスは同族の牛肉を好んで喰らうようになるほど仲がいい。

……。

で、その二人がここで何をしていたかって言うと、当然、ウェーブバトルを観に来たらしい。

元ルナルナ団メンバーとして自分が出たいところを、ぐっと堪えて、その腹いせに僕が負けたのを冷やかしにきたようだ。

ミソラちゃんが降ろしてくれた場所に、一番に駆け寄ってきてた。

「……で危うく食い逃げに間違われるとこだったんだよ」

「あはは、食っても逃げられないよね。その身体じゃ」

「はんっ！」

ゴン太の話はいつ聞いても同じだなぁ。

牛丼か、牛丼か、牛丼か、暴れるか、それだけだ。

「逃げるか逃げられないかで言ったらそりゃ逃げられんわ。否定しねぇ。ただな、俺は太っているわけじゃねぇ。この腹の膨らみはな……」

意味深にためる。

「膨らみは？」

「この膨らみには優しさが一杯詰まってるんだ！　ゴンターガッ！！」

「……ナンスカ」

……それは、女性のお胸に使う言い回しではなかったか？

っていうか、最近、それ、ネタにしてるよね。

とりあえず、ナンスカの方向をみて土下座してくれ、頼むから。

「あのさぁ、ゴン太、それをネ……」

「ゴンターガ様とお呼びっ！」

「お、お呼び……？」

ゴンターガ様とは、ゴン太がSに目覚めた裏の顔……ではなく、南アメロッパのナンスカ村に伝わる、世紀末に現れるという救世主のことである。何の悪戯か、ゴン太に似ている。

そのせいで偽物が調子に乗っているのだ。

「ゴ、ゴンターガ様……」

「気安く話し掛けるでないわ！　雌豚がっ！」

「理不尽だ！！」

くそぅ、人が偽物を崇めてやったというのに……。

あと、せめて雄にして。

「僕、実は、牛より豚のが好きなんだよね」
「ッ！？　誰か、この非国民を捕えよ！　打ち首にせいっ！！」

……これのどこが救世主なんだろう。
確実に破滅させる方だよ。
ナンスカの民もよく間違えたことよ。

「ガハハ、牛丼だ、牛丼をもっともってこぉい！　酒と女も一緒にだぞ！　……なに、良い女がいないだと？　えぇい、隣りの村から引っ捕らえてこい！　……構わん、反抗するものは皆殺しだ！！」

おぅい、誰かゴンターガ様を止めてくれぇ。
……。

……っていうか、マジで、一回、ナンスカの民に一人ずつ土下座して回ってくれ。
本物の風評に関わる前に。

「おい、スバル。電話だぞ？」
「げっ、……だ、誰？」
「委員長」
「……」

あ、ミソラちゃんが電波変換した。
やっぱり、金髪の方も、かわいいなぁ。

……おや、司会がツカサ君になってる？

「現実逃避は済んだ？」
「……うん」
「生徒会長室に来て、すぐ」

「え、なん……」

通話時間６秒。

なにをそんなに急いでいる……？

何故、いま、生徒会長室？

……怒ってるのか？

「おい、委員長か？」

「うん。……ゴン太も来る？」

「ったりめぇよ！！」

事件、といえば？　０２

……く、なんどっ、何度やってもこうなのか、ぼくは。

なにも告白しに来たわけじゃない、……まして襲いに来たわけじゃない、なんらやましいことはないじゃないか。

……呼ばれて来たんだよっ！！

なんでっ、なんでこの部屋に来るだけで、こんなに緊張するんだ！？

呼ばれたら即座に飛び出るのがお決ま……礼儀だろう？

委員長待たせたら逆に危ないよ！

頼むから、はやく……。

……。

いい加減、自分でも呆れを通り越して、いらいらしてきたーっ！！

ぬあああああナアアアアアアアッッ！！

……。

「おい、手、震えてるぞ」
「く、ゴン太ならわかってくれるだろう？」

……はふぅ。

ムリす。

委員長の子分として僕よりも長く付き従ってきた彼なら、ミソラちゃんのときとは違って、この恐怖を一緒に共有し、理解してくれるものと思い込んでいたが、中学に上がるときにその呪縛から解き放たれた彼は、元同僚を、あろうことか、慰めるというよりは同情、哀れみの目で見ていた。

ちぇ、すっかり他人事でいやがる。
僕も向こうに行けばよかったなぁ。

なんて考えながらプルプル震える右手を左手で必死に誘導して、ドアノブを握ろうとするも……。

……。

「はやくしろよ！」

躊躇う僕を押し退けて、勝手に、そしてノックもなしに扉を開けてみせる。

オゥ、マイ……って、なんたる暴挙。

もはや何のためにゴン太を連れて来たのか、当初の目的とは掛け離れた状況になってるけど、……これはこれでラッキーかもしれない。

責任をすべてなすりつけるチャンスかも。

「よかった。今日は早く来たのね」

普段自分の席で踏ん反り返っている委員長にしては珍しく、入って来るなり立ち上がって駆け寄ってくる。無許可での入室を責めるでもなく、慌てているご様子に加えて、僕の手をとってなにやら不思議なお顔。

僕を見て、安心したような、逆に心配しているようなそれで、ただならぬ雰囲気を醸し出している。

したがって、嫌な予感。

「おい、委員長。司会はどうしたんだよ」

所在無さ気にしていたゴン太が、ついに声をかけた。

委員長、居たなんて知らなかったわ、とばかりに僕から離れて赤面。

巨漢の影に隠れるようにしていた僕に、彼を避ける形で近寄ってきたのに……さすがに、それはないだろう。

……あ、ほらぁ、ゴン太がみるみるうちに肩を落として、ドヨーンなんて口に出して、しかも連呼しちゃってるじゃないか。

……でもね、僕はフォローしてあげないんだよ。……無駄にヒヤヒヤさせてくれた分は落ち込んでもらわないとね。癖になるからさ。

「し、司会ならツカサ君に任せてあるわよっ！　って、そんなことより今はっ！」

ゴン太の傷心なんて意にも介さず、僕よりも華麗にスルーして、僕だけを自分の机に無理矢理誘う。完全に蚊帳の外なったゴン太を他所に、委員長は大分慌てて机の前にいる僕に見えるようにエアディスプレイを展開した。

……。

ム……はぁ、なるほど。

あぁ、わかったよ。

つまり、ここで1したら、次にここで0になって、で、ここにaが現れて、さっきのbが消滅するんだね。

……。

うん、まったくわからん。

この英数字の羅列はなんだろうか。

意味があるのだろうか。

……いや、僕に見せる。

僕がここから見出だせたのは、これが何かを意味するものであって、僕が理解できないものであるということだけだ。

……。

委員長よ、そんな目で見つめないでおくれ。

僕は万能じゃない。

ラ・ムーじゃないんだ。

武力は行使できても、知力はあなたにすら勝てません。

……。

そんな僕になにを求める……？

「あ、これじゃなかった」

「ずるーんっ」

……ここにきて、盛大にずっこけるとは思ってなかったよ。

なんか自分の無知を痛切に実感させられた気分だ。

委員長、やっぱり住む世界が違いますね……。

……はぁ、まぁ、それで？
本物は？

「これよ、スバル君！」

委員長が再びパソコンを操作して、表示されたエアディスプレイには。

『ロックマン　ヲ　マツ』

ム……はぁ、なるほど。

……簡潔にして明快ですな。
打って変わって小学生になれば誰でもわかるレベルだね。
ニホンの識字率ナメたらだめだよ。

うん、じゃあ、そこで……。

『ロックマン』、ろっくまん？

……。

あぁ、僕か。
あるいは、ロックか。

なになに、僕になんか用なのかな？
呼びかけられただけでは内容がわからない。
先に進もう。

んで、『ヲ』？

を、はさすがに助詞だよな。
てにはを、てにはを。

これは他の品詞は考えづらいし、文脈からして間違いないよね。

……。

よし、『ロックマンを』だ。

『ロックマン』は目的語だったのか？
ってことは、このあとに述語、つまり動詞がくるのかな？

ニホン語の王道パターンだからね。

ここまできたら、次に何がくるか予想して読まないと長文はきつくなるぞー。

よし、じゃあ、次は動詞だ。

『マツ』……。

あれ？　ニホン語で動詞の『マツ』って、一般的なところでは、待つ、しかないぞ？

……。

まぁまぁ、先は急ぐな。

要するに、この文は省略された主語が目的語を待っているということだ。

省略はどんな言語でも起こることだからな。

人間はどこにいたって怠け者だってことさ。

それはともかく、じゃあこの文に主語を補って、ちゃんとした日本語らしくしてやると。

『私はロックマンを待つ』

「こ、これは……」
「す、スバル……」
「ゴン太、起きたんだね。……そうだ、もしかして」
「もしかすると」

……ゴクリッ。

「「ラブレタァァァァッ！？」」
「ちがうわよーっ！！」

計らずして重なった声を、委員長が冷たく一蹴する。

むぅ……、もう少し男の妄想に付き合ってくれっていいじゃないか。
ゴン太は本気だったかもしれないけど。

こっちは何か危険なにおいを紛らわすのに必死なんだぞ。

「これは犯人からのメッセージ。犯行声明。果たし状よ。わかる？」
簡単に言っちゃったぁ！？
僕が懸命に目を背けていたのを、そんなあっさりと、しかも呆れ

顔で言った！

……。

うぅ、一難去ってまた一難。

僕はもう諦めるしかないのか。

僕の人生に安息の時はないのか。

……。

あー、もう、考えるのやーめた。

結局、それが一番楽なんだよね、人間。

前にあるものを、まず片付けよう。

……はぁ。

＊

「今から1時間ほど前、ちょうどウェーブバトル大会が始まったころ、この学校の中枢電脳は何物かにサイバー攻撃を仕掛けられたの。外部からの侵入形跡は見られないから、たぶん学校内のどこかの端末からだと思われるわ。それで、侵入したハッカーは、下級ウィルスを大量にばらまきながら進んで、中枢の障壁も、対処に当たったセキュリティウィザードも、外部から逆襲を仕掛けた教師陣もすべて、あっという間に突破して、中枢電脳は制圧されたわ。まぁ、さっき間違えてスバル君に見せたのがその経過ね。で、そのハッカーは学園の機能と情報を掌握した後、在校生全員の個人情報を人質に、ロックマンが中枢電脳の最奥部に来ることを要求し、その場に留まって沈黙。……あ、あと、サテラポリスには連絡するなってのもあるわ。で、他は特に電波機能を不正利用したり、制限する行動は見られないわ。まぁ概ね手中におさめて終わりよ。……一体、何がしたいのかしらね」

「何がしたいのか、は学校側だよね。何、易々と掌握されてんのさ。おまけに情報を人質って、前代未聞だよ」

「しょうがないわ。向こうが凄腕過ぎたのよ」

「それは言い訳にならないだろう。……まぁ、もう手遅れだから言ってもしょうがないか。……委員長はその凄腕さんの目的はなんだと思う？」

「今のところ、狂気的なロックマンファンとしか言いようがないわね」

「それ、委員長じゃなくって？」

「……」

「……あー、で、そのロックマン卿凄腕さんをどうするつもりなのさ、学校側は」

「おとなしくロックマンを差し出すつもりらしいわよ」

なにそれっ！
勝手決めんなよ！

っていうか、学校が生徒売るな！
せめて守る姿勢だけでも見せてくれぇ！

「さ、サテラポリスに連絡は入れてないの？　まさか、そこも従って……」
「連絡するつもりは多分最初からないわよ。学園の恥をわざわざ公表するようなものじゃない。そんなこと、ここじゃなくったってしないわよ」

……。
やだね、人って。

「まぁ、ロックマン様にはそれなりの実績があるから、信頼されてるってことなんじゃない？」
「そういう無責任な信頼は嫌だよ。……くそぅ、いつもいつもテストや成績で虐めてくれるのに、有事とあらば信頼しているという建前で僕を戦場に送るか……」
「……成績はスバル君が勝手に悪いのでは？」

む……、痛いところを突いてくれるな。
でも、僕だけのせいじゃないと思うんだけどなー。

ってそうじゃなくって……。

「うーん、これは僕は行かなきゃ行けないのか？　まぁ、いけないよな……」

「まぁ、そうなるわね」

そうなるわね、ってあなた。

腕組みまでして、すっかりいつものペースを取り戻しちゃって。

さっきまでの慌て振りはやはり映像として残すべきであったか。

委員長への強力な対抗手段に……って、だから、そうじゃなくって。

いかんいかん。

そろそろ気持ちを切り換えねば。

凄腕ハッカーからの果たし状。

個人情報流出の危機。

ここからはシリアス展開だ。

＊　＊

「いい、スバル君？　あなたはこれから指定された中枢電脳の最奥部にあるコントロールパネルエリアに行ってもらうけど。……何が起こるかわからないわよ？　私と通信は繋がってるけど、臨機応変に対応してもらわないと困るわ。呑める要求は呑むのよ。……例えば？　例えば、サインください、とかだったら……つまらなくて悪かったわね。で！　うるさい！　で、微妙な要求、絶対に無理な要求の場合は指示を待つこと。勝手に行動しちゃダメだからね。いい？　ウォーロック、あんたに言ってるのよ！　……うっ、そ、それで、犯人がどんな形でその場にいるのか、もしかしていないのかわからないけど、出来たら捕まえる、出来なきゃ手掛かりを必ず掴むこと。逃げられたら足跡くらい見つけてきなさいよ。

最悪は、あなたと個人情報が無事ならそれでいいわ。学園の評判を落とす結果にだけはしないでちょうだい。……これは学園の存亡の危機でもあるのよ？　個人情報が流出したり、文化祭の来客の方々に何かあったら、わかるわよね？　しっかりしてよ！

でも、これは私たち白金内閣には絶好のチャンスよ。教師陣が手も足も出せない中、スバル君が事件を解決に導けば、これ以上ない効果をもたらすわ。私の政権は盤石なものとなるの。学園のピンチを我々のチャンスに変えてみせなさい！　……え、何言ってるのよ。スバル君は私たちのメンバーよ。同士じゃない。当然じゃない。

ゴン太。あんたも行ってきなさい。何もスバル君一人で来いなんて誰も言ってないわ。スバル君は先の試合で少なからず疲弊しているわ。電脳空間を掌握されて何が起こるかわからないから、あんたがしっかりリードして、スバル君の体力を温存するのよ。……燃え

てきたのはわかったけど、雄叫びなんてあげないでよ。いろいろと困るわ。
さぁ、じゃあもう行きなさい。時間があるのかないのかわからないけど、早い方がいいでしょう。……私は通信くらいでしか助力できないけど、……頑張ってね。
……スバル君。重い責任を負わせているのは、わかっているわ。でもね、こうなってしまった以上、あなたにしか出来ない、……ううん、あなたになら出来るわ。必ず。……大丈夫、あなたは強い。世界を一人で何度も救ったんですもの。そんな男がこの世に他にいると思う？　歴史上にだっていないわよ。これまでも、これからも、スバル君だけ。誇りなさい。
……そう、じゃあね。いってらっしゃい」

事件、といえば？　０３

これから久しぶりに、背負うものを背負った本気のバトルが待っているかもしれないと思うと、妙に気分が昂揚して、ウェーブロードを駆けている間も、足がはずん……いや、震えているような気がする。……もちろん、委員長におだてられて、ノセられて、わくわくピクニック気分なわけではない。単純に、恐れ戦いているのである。

いいとこみせなきゃとか、ご褒美もらえるかなとか、やましい心は微塵もない。

……しかし本当に、後ろ盾がないのは厳しいものがある。

学校側が不祥事を隠したがるのもわかるが、やはりもしものことを考えたら、サテラポリスに連絡をいれなきゃダメだと思うんだけどなぁ。

さっき、せめて、友人として、暁さんだけにでも連絡入れて、対処法を考えてもらおうと思ったのだが、委員長に全力で阻止されたあたり、案外、これは学校全体がグルとなって、僕を亡きものにするための作戦なのかもしれないなぁ。

僕、敵多いからなぁ……。

もちろん、原因の主は生徒会の非正規活動だ。

まったく、白金内閣は程度の易しいマフィアみたいなもんだ。

ま、冗談はとりあえずこの辺りにして、いずれにしろ、このまま、

僕が単独でこの事件に挑むなら、当然、失敗は許されないわけだ。

しかしもしも、失敗してしまった、例えば、個人情報の奪取に失敗する、とする。

これだけならば、百歩譲って、上手な情報操作でなんとか学校に非がないようにみせられるかもしれないし、たとえバレたとしても、五万歩譲って、世間もいつかは許してくれるかもしれない。よくあること、らしいし。

だけど仮に、奪取に失敗してなおかつ、僕やゴン太、あるいは生徒の誰かが命を落とすようなことがあったら、それはもう取り替えしがつかないだろう。

個人情報を漏洩させるし、サテラポリスに通報しないばかりか、生徒に、無理矢理、対処させて、危害を及ぼすとは何事か、って大騒ぎだろうね。

そうなったらもう、大人しく責任者は法に裁かれてもらって、学校は廃校になり、生徒は悲しいことに散り散りになるしかない。

そのとき、僕はいないかも、だけど。

あぁ、むべなるかな……、とは言うものの、そうさせないためには僕が頑張るしかないんだよな。

さて、委員長の指示に従って、ゴン太と共に中枢電脳へのアクセスポートをもつスーパーコンピュータがある部屋までやってきた。まるで僕らを手招きしているかの如く不自然なくらい、普段と変わ

らぬ様子に多少辟易しつつも、すぐさま、二人で電脳空間へ突入を開始した。

何も考えずに。

教えてもらった長い長いパスワードを入力すると、ハッカーとは違って、公式なアクセスなので、何者にも邪魔されることなく、一気に電脳の最奥部に引っ張られる。

途中でハッカーによる妨害がないのは、言わずもがな。

「おぅ、着いたな。ハッカーの野郎はどこにいやがんだ」

ゴン太、もといオックス・ファイアが多少緊張を含んだ野郎言葉で決めている。

だが、今やそんな事態ではなかった。得意げになるような、かっこいい登場は決められていない。

委員長も黙り込んでいる。

「委員長、これは……」

『やられたわね……』

結論を言うと、僕とゴン太は犯人の術中に嵌まった。

ここは中枢電脳の最奥部などではない。

これは明らかに防壁迷路だ。

防壁迷路とは、セキュリティプログラムの一つで、それが機能する電波空間や電脳に不正にアクセスしたハッカー等を取り込んでしまい、中は文字通り迷路のようにウェーブロードが張り巡らされていて、なかなか目的地に辿り着けないよう設定されている。攻撃能力はないが、時間稼ぎに非常に効果的なプログラムだ。

これまでに、ＦＭ星人侵略事件でスペースコロニーからアンドロメダを目指してコロニーの電脳を攻略したときや、ムー大陸、メテオＧ内部に侵入したときなどに経験している。

それら先進電波文明の防壁迷路に比べれば、地球のそれなどないに等しい……が、それはあくまで比較の話であって、単に前者が凄すぎるだけだ。後者も十分に厄介である。

ただ、地球の防壁迷路の場合、対策次第では決して不可避ではない。

今回は、この学校のスパコンのセキュリティに端から防壁迷路がないことと、犯人がそのプログラムを書き換えていることに気付かなかったことから、対防壁プログラムを持って来なかったのが失敗だった。

アクセス前にもう少し確認していたら、気付いていたかもしれない。

しかし、すでに犯人の手によって、公式にではなく不正にサイバー・インしてしまった今では、もうどうしようもなかった。

くぅ、犯人は一体何を考えているんだ。

自分から最奥部に呼び出しておいて、どうして時間を稼ぐような真似をする。

「おいおい、何黙り込んでんだよ。これから一大決戦だって言うのによ。士気上げていこうぜ！」
『ゴン太……、スバル君、とりあえず、その防壁迷路を突破するわよ』
「了解」

言う通り、悩んでいてもしょうがない。犯人が何を企んでいようとも、先に進むしかない。

周囲は暗闇に包まれ、無秩序に走るウェーブロードだけが煌々と灯っている。

果てしなく続く道を、僕たちは道なりに進む。縦横無尽に巡らされているとはいえ、その間を跳躍して移動することはできない。現実世界の電波はウェーブロードが存在しない場所でも少なからず流れているために、僕らは空中に漂うことや地上を走ることができる。しかし電脳空間の電波は、その空間を創る機器類の回路上にしか、つまりウェーブロード上にしか走っていないのだ。故に、僕らは道からはみ出すことはできない。

ゴン太に罠に嵌まった現状を説明しながら、ひたすらウェーブロードを駆け抜ける。

「しかしよぉ、この迷路、ちゃんと出口があるのかよ。さっきからずっと、同じところを回ってる気がするぜ」
『いいえ、ちゃんと前進しているわよ』
「普通は何か道標になるようなものがあるんだけどね」

それは、時に謎解き染みたものだったり、時にウイルストラップだったり、と種類によって様々だが、電波防壁は普通、効率的に時間稼ぐために、要所々々にトラップを仕掛けるのが定石だ。嵌められた者もそれを手掛かりに攻略していくものだ。

しかし、ここにはそれといったものがなかった。

僕とゴン太は迷路の本分に従って、迷いに迷っていた。

「だからよぉ、やっぱりロックマンの勘なんか信じないで、初めからウェーブロードの壁に手ぇついて進むべきだったんじゃないのかよ」
「悪かったよ。でも、それじゃやっぱり時間が掛かり過ぎるし、その方法は何らかの工夫を講じられると上手くいかなくなる、って何かで聞いたことがある」
「何らかのって何だ？」
「ふふ……忘れた」

う、ぐわあぁ、そんな目で見るな。
忘れたもんは、忘れたんだ。
もう誰もその話題に触れてくれるな。

「いっそのこと、二手に分かれるか？」
『それはやめなさい。ここで戦力を分断されるのはまずいわ。ロックマン様は体力を消耗しているし、あんたは一人で事態に対処できるほどの実力じゃないでしょ。ムリよ』
「うぅ、委員長の指示が、心にグサグサとくるぜ」

戦闘員のやる気を削いでどうするんだ、とうなだれるゴン太。

ま、たしかに言い過ぎだよな。

「なら、どうするのさ」

話を逸らす意味も含めて訊いてみた。

『待って、今、ちょっと、もうすぐ……』

うん？
何かやっているようだな。

そういえば、さっきからこちらとの通信も少なくなっていたし、なるほど、片手間に行っていたのか。

それでも、あれだけ、毒づけるんだから大したものだ。

はて、では一体何を？

「あの、何を？」
『……』
「……」

『……うるさい』

……反応が遅いだけ、だよね？

『……』

「……おい」

今度はゴン太のターン。

『……』

「……」

『……』

「……委員長のバカ」

……。

……。

仕返しのつもりか？

……。

『よし、できた！』

しばらく待たされ、そろそろ無視して、また先に進もうか考えていたところ、不意に委員長が声を上げた。

「どうしたの？」

『構造解析が終わったわ』
「こうぞうかいせきぃ～？」
『スバル君、わからないからって、その反応はやめた方がいいわよ。
……まぁ、簡単に言うと、あんたたちのいる防壁迷路の地図を手に入れたって感じかしら』
「なんだって！　そんなことができるのか」
『白金財閥の力と私のスキルを考えれば、当然のことよ』
「すげぇ、さすがは委員長だぜ！　よっ、大統領！！」
『……』
「……あ、あれ、古過ぎたか？」

ゴン太くん、スベっているのはネタのせいだけじゃないぞ。

『ゴン太、あとで二人でお話、ね』

うわぁ。

……死の宣告だ。

「ま、まぁ、落ち着いて、今はそれどころじゃないだろう？　さぁ、委員長、僕たちを出口へ案内してくれ！」
『……そうね。先を急ぎましょう』

ゴン太、これは貸しだからな。

＊

さて、この言い回しは何度目になるのか。僕らは委員長の指示に従って、迷路を行く。

この防壁迷路は非常に高度なものだったらしく、右に左に、そろそろ方向感覚が狂ってきた頃に、ちょうど僕らは出口に辿り着いた。

いや、正確には行き詰まった。

「ねぇ、一応訊くけど、行き止まりじゃないよね？」

『そこの先が出口よ。答えならあるじゃない』

立ちはだかる暗い壁。

途切れるウェーブロード。

その直前に、明らかに罠とわかる、緑のミステリーデータ。

これを調べれば、道は開けるだろう。

しかし、その前に、一騒ぎあるに違いない。

不幸にも、今、アントラップは携帯していない。つまり、直接データを解凍して調べるしかないのだ。

時間がなかったとは言え、今回のミッションはなかなか酷いな。

僕はいつものことだが、委員長がここまで無策なのは珍しい。

いや、無策と言うよりは、何から何まで裏目に出てしまった、と

言うべきか。防壁迷路は結局、彼女一人で攻略したのだから、僕と一緒にするのは、さすがにないな。
何にしても、完璧主義の委員長が指揮する任務で失策続きなのは事実なわけだが。

「開けてみるしかないね」
『開けなさい』

許可が下りたところで、輝きながらくるくると回転している、緑のミステリーデータに手を翳す。

「……ぁ！！」

それが合図であったのか。
僕の操作とは無関係に、ミステリーデータは内包していた膨大なデータを一度に解放する。
視界が、強烈な光に覆われ、その圧倒的なデータ量に跳ね飛ばされる。

爆風に似た勢いに、完全に自身の自由を奪われて、危うく電脳世界から強制サイバー・アウトさせられそうになるが、オックス・ファイアの無骨なアーマーに抱きしめられて、なんとか安全圏へ離脱する。

未だ恒星の誕生を思わせる強い光を帯びていて、その内容を露わにしない。

……あ、危なかった。
即座にバイザーが遮光量を調節してくれなかったら、目が完全にやられていただろうな。

そして、この恐ろしいデータ内蔵量は、おそらく大容量圧縮型ウイルスパックか。
……これは、よっぽどの強敵が入ってるか、雑魚でも相当量が入ってるのは覚悟した方がいいな。

……おぉ、光が弱まってきて、まだ内容はわからないが、先に、ウェーブロードが繋がったのは確認できたぞ。
よし、これならば、ウイルスを避けて、先へ進むことだってでき……、って、え、えぇ？
なに、この、黒い大群……。

「メットメトメトメトメトメトメットメトメトメトメトメトメトメトメトメトメットメットメトメトメットメットメットメットメットメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメット――」

これは……。

「なんだよ、これ、ただのメットリオじゃねぇか。ビビらせやがって……。スバル、見てろよ、俺がモーゼよろしく道を切り開いてやるからな」

言うがはやいか駆け出す。

異常な光景に、呆気にとられ、一瞬反応するのが遅れた。

……その一瞬が、すべてを決定付けた。

「ごんたあああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

＊　＊

メットリオは低級ウイルスだ。
起源は古く、２１世紀の中頃に電波社会が確立されるのとほぼ同時期、工事現場で自然発生したとされる。ヘルメットを被ってツルハシを構えているその恰好から、もはや疑う余地はなかった。
意外と愛くるしい顔や行動で思わず油断してしまうこともあるが、それにしても、ウイルスとしては雑魚以外のなにものでもない。

ただ、それは天然の、ヘルメットの色が黄、赤、青のメットリオまでに通用する定義だ。

僕たちの前に立ち塞がるメットリオの大群のヘルメットは、一様にして黒色。
この黒メットリオは、近年急激に増加する電波人間が、いずれ軍事利用されるときに備えて、アメロッパ軍が試験開発したと言われる、対電波人間ウイルス兵器だ。もちろん極秘事項なのだが、サテラポリスのお手伝いをしている僕は、暁さんから教えてもらったので知っている。それに、ネットでもまことしやかに囁かれていたことだ。アメロッパが他国への威嚇も兼ねて、わざと噂程度に情報を流していたのかもしれない。

問題なのは、その軍事兵器が何故ここにいるんだ。

それも、この大群……。

事件に、アメロッパが関与しているのか？
いや、そこにどんな意味があるというのだ。

わざわざ自国の兵器を他国に晒し、それもその領土内で事件を起

こして、発覚すれば国際問題に、どころか戦争に成り兼ねない危険を冒してまですることが、ロックマンの抹殺か……？

それではあまりに見返りが少ないし、ましてアメロッパにそれをする動機がない。

一般には公表されていないが、先進各国の首脳レベルであれば、過去に起こった地球の危機が、すべてロックマンによって解決されていることは知っているはずだ。

それを除いたとしても、アメロッパにはたくさん恩を売っているから、助けられることはあれど、攻撃される謂れはない。

やはり、この事件の犯人が、アメロッパ軍から奪取したと考えるのが妥当、か。

しかし、そんなことが現実に可能なのか？

アメロッパ軍のセキュリティなんて、もはやセキュリティという言葉で対応できるのかってくらい、攻性にして堅固な、世界最高峰レベルのセキュリティシステムだぞ。

うーむ、やっぱり、暁さんには連絡しようかな。この事件のことは伏せて、この黒メットリオの件について、アメロッパ軍部に問い詰めてもらおう。

それなら学校側も文句はないだろう。

……っていうか、事ここに至って、まだ事件を隠そうと努力する僕って、完全に犯罪者だよなぁ。

い、いや、もし怒られたら学校側に脅迫されました、って言えば済むことか。どうせバレたらこの学校は潰れるだろうから、罪の一つや二つ増えたところで変わらないさ。

そうとなれば、ここはさらに後退して、体勢を整えよう。
いくら僕でも、この状況下で無策に突撃していくなんて馬鹿な真似はしないさ。

「――いてやるからなっ！」

カミカゼにはなりたくな……って、え？
……今、なんて？

「オックスタッ――」

技名を言い終えるより先に、その巨漢は超加速して、暗闇に消えていく。

ちょ、嘘だろ……。

「ごんたあぁぁぁぁ！！」

さながらビックバンだった。

巨大な光が暗い電脳空間に炸裂すると、遅れて地面を揺るがす大音量と爆風が到達。
爆風に乗って、ボロ雑巾のようになったオックス・ファイアが僕の遥か後方に飛んでいった。

『スバル君！　ゴン太の救援をっ！！』
「わかってるよ！」
「スバル！　メットリオが放った衝撃波が接近中だっ！！」
「ッ！！　了解！」

目を凝らすと、ウォーロックレーダーが捕捉した通り、前方のウェーブロードが沸騰しているかのように切れ切れに乱れながら、大きく波打つ白波が伝播して迫りくる。
こんなに離れているにもかかわらず、威力はまだまだ健在のようだ。

「バトルカード、ディバイドライン！」

足元で電波の流れを一時的に塞き止めて、ウェーブロードの繋がりを断つ。
分けられた向かい側のウェーブロードに波が到達。こちらまで届かないことを確認。

よし、上手くいったか。
しかし、ディバイドラインなんて初めて使ったよ。
よく手持ちにあったな。

今のばっかりは運がよかった……って、今は！

オックス・ファイアの下へ駆け寄る。

……ッ！
傷は深いな。
かろうじてデリートは免れたって感じだ……。

「ゴン太！」
「……うっ、スバルか」
意識はあるか……。
なら、早くウェーブ・アウトさせなければっ！

「ゴン太、大丈夫か？」
「……スバル」
「……？」
「俺の死を無駄にするな」
「いやっ！　完全に犬死にだけどなっ！！」

はっ！　つい本音が！

「俺のことは気にするな……。さぁ、早く行けっ！　みんなを……、委員長を守れるのはお前だけだ！　行くんだ！」
「ゴン太……」

何、はしゃいでんだよ……？
まぁ、冗談が言えるくらいの体力は残ってるってことか。
「……わかったよ。この事件、僕が一人で片付ける」
実際、これだけの兵器メットリオを突破するのは厳しいだろう。

一度退いて、ミソラちゃんとツカサくんとジャックだけでも連れてくるしかなさそうだ。

話を合わせているのは、ゴン太がうるさいのでさっさと下がらせるためだ。

「ここは僕に任せて、ゴン太は早くウェーブ・アウトをっ！」

『無理よ！』

＊　＊　＊

「無理ってどういうことだ！！　委員長！」

『犯人が妨害電波を流しているようだわ。ウェーブ・アウトどころかサイバー・アウトだってできないわ』

「できないって！　このままじゃゴン太がデリートされるんだぞ！」

『わかってるわよ！　今、なんとかこっちから引っ張りだそうと試してるんだから！』

「ゴン太を戦線に立たせたのは委員長だろっ！　なんとかしろよ！」

『私だってこんなことになるなんて思ってなかったのっ！！』

「おい！　ケンカしてる場合じゃねぇ！　奴らがすぐそこまで迫ってるんだ！　ディバイドラインの効果も切れるぞ！」

ウォーロックが通信に割って入る。

くそ……！
いったい、どうしたらいいんだ！

「……ここは俺とスバルでなんとかする」
「なんとかするって！！」
「うるせぇ！！　委員長、お前はゴン太をなんとかしろ。いいか、絶対だぞ！」

ロックに無理矢理引っ張られて、オックス・ファイアから離れる。

あんな息絶え絶えで……。
一撃でも喰らったら……。

「スバル」
「なんだ」
「委員長を信じろ」
「ッ！」
「ゴン太が気になるのはわかる。だが、俺達にはどうしようもねぇだろうが。俺達は目の前の奴らに集中して、抜かれないようにするしかねぇだろう」
「……そうだな」

僕が今ゴン太にしてやれることは、いつの間にかさらに迫った黒メットリオを、ここで食い止めるしかないんだ。
ゴン太がウェーブ・アウトできるかどうかで気を揉む必要はない。

委員長がゴン太を引っ張りだして、
それまで僕が時間を稼ぐ。
これが、今、最善の構図か……。

「委員長」
『なによ』
「ごめん。さっきは言い過ぎた」
『……ふ、ふん』
「僕はこいつらを食い止める。だから、委員長、ゴン太のことは頼んだ！」

最後のとこは、あえておどけた口調で言う。

『と、当然じゃない』
「もうすぐに迎撃しないとダメそうなんだ。……じゃ、頑張って、行くわ」
『ちょ、ちょっと！』
「ん？」
『し、しっかりやりなさいよ！　私に言っておいて、スバル君が怪我したら話にならないんだからね！』
「ふふ、ありがとう」
『べ、別にあなたを思って言ってるんじゃないわよ！　ゴン太のためなんだからね！　勘違いしないでよっ！』

「はいはい、じゃ、行ってくるね」

今まで、委員長は僕らを何度も救ってくれた。
きっと大丈夫だろう。

あと、最後にツンデレが聞けてよかった。

和んだ。

＊　＊＊　＊

「スバル、ディバイドラインはまだ残ってるか？」
「奇跡的にもう一枚ね。この前、カードトレーダーで在庫処理したときに手に入れてたみたいだ」
「……お前、それ、よくそのまま注ぎ込まなかったな。そんなカード、滅多に使わないだろう？」
「僕は一種類ごとに二枚は残す主義なのさ」
「ははー、またそれは、無駄なことを」
「心配症なんだよ」

後々になって後悔するのは嫌だからね。ちょっと重いくらい我慢すれば、今日みたいにいいことだってあるものさ。

「まぁいい、あるなら今すぐここで使え、そして打って出るぞ。出端を挫こう作戦じゃないからな」

「それじゃ、僕らも退けなくなるよ？」

「退くつもりなのか？」

「まさか、確認のつもりで言っただけだ」

「よし、じゃ、行くぞ！」

「応さ！」

ディバイドラインが発動したのを確認。

これが、背水の陣というやつか。

本当に、心の中で何かが吹っ切れた気がした。

その、何か、はよくわからない。

でも、僕にとって悪いものではないことは、確かにわかっていた。

事件、といえば？　０４

左手にバスター、右手にソード、とお馴染みの装備でもって突撃を仕掛ける。
ドキドキ、心臓が高鳴って、アドレナリン分泌量が増えていくのが、周りの景色がスローモーションになっていく様子からわかる。

わさわさと黒い六本足の悪魔を思わせる黒メットリオに、一匹一匹を確実に判別出来る距離まで詰め寄ったところ、奴らはよく訓練された軍隊の如く一斉に衝撃波を、次々と、絶え間なく、放ち始めた。
怒涛の勢いで迫りくる白波を、ウェーブロードが展開する電波範囲の上限ギリギリまで跳躍して、この弾幕をかろうじて躱す。メットリオの衝撃波は平面にしか展開できないのだ。
あらかじめ着地点を、黒メットリオが群がる中心に定めて踏み切ったので、飛距離は生身では考えられないくらいぐんぐん伸びていく。その間、バスターでもって中心地を集中的に攻撃して、倒せないまでも着地できるよう穴をつくる。
ついでに、数も確認した。バイザーに数字で６０と無数のロックオンサイトが表示されている。

着地の瞬間、勢いに任せてソードを突き出すと、狙っていた一匹にツルハシで簡単に受け流され、さらにそれが湾曲したＴ字に設計されているため、上手くソードを搦め捕られて引き付けられる。
背後から他のツルハシが振り下ろされるのを感じて、搦め捕られたソードが折れないように、受けている力のベクトル方向へソードを倒すように注意しながら、身体を丸めて浮かせて、その場で回転

機動。

こいつらは軍に開発された以上、必ず同士討ちはしないように設定されている、はず！

そもそもその考えがあって、黒メットリオの中心で戦うと決意したんだ。

今も、衝撃波を放つのではなく、ツルハシ自体を武器として攻撃してくると考え、逃げるのではなく、攻撃して跳ね返す選択肢を選んだ。

そして、実際当たりだった。

振り下ろされる三本のツルハシを上手く抜け出たソードで、斜め下から掬い上げる。

先に当たった二本は、相手が完全に虚を衝かれたと思われ、群れの外側方向に飛んでいった。

最後の一つは、ギリギリ、ソードの根本が間に合って、ソードも破壊されたがなんとか攻撃を食い止める。

着地。

元の形に戻って、後ろの死んだ二匹をロックのビーストスイングに始末させ、前方で未だ引き付ける体勢をしていた一匹を零距離バスターで撃破する。

前方で消滅した黒メットリオの名誉のために言っておくが、彼が遅いのではなく、僕が速いのだ。

休む間もなく両サイドからくる攻撃を一度上空に退いてやり過ごし、外側でオックス・ファイアへ続く道に興味を示し始めた黒メットリオの注意を再度こちらへ向けるため、パワーボムを投げ付け、新たなソードを構えて、降り立つ。
その隙に黒メットリオは前線に出来た穴を埋めていた。

「くっ、数が多過ぎる！」
「スバル！　さっきパワーボムで直撃した一匹が消えたみたいだ！」
い、一匹かよ……。
……厳しい！

バスターの連射で怯ませた一匹に強烈な蹴りを喰らわせて外側へ吹き飛ばし、出来た穴に滑り込むと、背後の僕がいた中心では、無数のツルハシがウェーブロードを貫いていた。
映画みたいに、しゃがんで、上でガチィ、大丈夫でした、なんてことはありえない。

ソードとバスターで両側にスペースをつくろうと、それぞれで攻撃するも、体勢が体勢のため、ソードは黒メットリオのヘルメットに当たって弾かれる。バスターは見事に貫き、そのさらに向こう側にいたのにも当たって怯ませていた。
大の字で寝そべる僕を第二包囲ラインを形勢していた前方（足下）の三匹が同時にツルハシを下ろす。

しかし、体育のサッカーのように、今いるところの僕だけを狙った攻撃なので、左に寝返りを打つだけで難無く躱す。

先詠みするような奴がいたら危なかった……。

しかし、俯せ。

すべてを死角に回して、どうしようかと逡巡するが、すぐさま反転して、先の三匹のツルハシを抱き込んで、再度反転。

身体を起こす力でもって引き寄せ、ある者はそのまま、ある者は泣く泣く手を離してツルハシだけ、反対の第一包囲ラインに投げ飛ばされる。

が、また俯せになってしまったので、仕方なくまたビーストスイングで隙を作ってもらって、立ち上がる。

ロックは機転を利かせて、ツルハシを手放した黒メットリオ二匹を消し去ると、僕の中に戻った。

一瞬、状況を見回すに、第一包囲ラインはすでにガタガタ、第二第三包囲ラインは一部崩されて後方ラインから人員を抽出中、そんな感じ。

なんか、ちょっと、一息つけそう。

「お前、なかなかの無双してんな」

先程投げたのと、それと縺れているのをまとめて切り裂いておく。

「……ふぅ、まぁ、そう、だね」

黒メットリオの衝撃波を封じ込めたのが、かなり大きなアドバンテージとなっているようだ。

（群れる黒メットリオの中心で戦うのは有効な作戦みたいだ。この弱点の情報をアメロッパか、反アメロッパ国に高く売りつけてやる）

「おい、スバル。物凄く暗黒なニヤけ顔になってるぞ」

おっと、僕としたことが、つい表情にでてしまったか。

……。

話を戻して。

また何より、死を身近に感じさせる過酷な戦いのため、人間の本性として極限まで高められた身体能力が、黒メットリオの能力値を上回っているのだろう。

人間やれば出来るってことか。

しかし、そのせいもあって、すでに疲労困憊。

まだ５０以上いるってのに、どうすんだろ。

「ロック、きみが、けっこう、役、危ね！　役に立ってるよ」

「へへっ、そうか？　もっと褒めろ！」

調子に乗って実体化したロックは、僕と共に完全に崩れた第一第二第三の包囲ラインを、持ち前の身軽さで切り裂いて掻き乱していく。

よし、この調子でいけば撃滅することも無理じゃないかも。

なんか、軍事兵器も大したことないな。統率がとれなくなっただけで、ここまで機能しなくなるなんて。黒メットリオも、所詮、試作品なわけだからな。

ちょうど、そんな風に、油断し始めたときだった。

ロックが唐突にあげた間抜けな声に、一瞬のうちに、冷や汗が溢れる。

「ディバイドラインの効果が切れた。しかも、外郭の黒メットリオが流れ始めた」

「バカ！　早く言えよ！」

助走無しの大跳躍。

一気に群れから飛び出て、突出した一匹のヘルメットに着地、前方に流れる力を殺さず転がり落ちるようにして、勢いに乗せてソードを突き刺す。

後ろに消滅した気配を感じつつ、一端距離を取るため前方に跳び退く。その間、ソードをバルカンに変換しておく。

「委員長！　まだか！？」

『……まだっ！』

「く、わかった！」

僕が中心から移動したことで、黒メットリオは続々とこちらに向かって歩き始める。

バルカンとバスターで弾幕を張って、少しでも進攻を遅らせているが、距離があるためダメージを与えている様子はない。

「おい、バカスバル！」

「なんだ！　って、バカスバルって、なんだ！？」

「そんな攻撃でどうにかなるわけねぇだろ！　早く、群れの中に戻れ！」

「戻れるわけないだろ！　こいつらを止めないと……」

「だから、止めるためにも、奴らの間に戻るんだ！」

……？

「わからねぇ奴だな！　こいつらは今、ディバイドラインの消滅にすぐ気付いて動き出した先行する少数部隊と、お前と戦うのに夢中になって僅かに遅れた本隊に分かれてる。そこの隙間に入り込むんだ」

「入り込んだって、その先行部隊を止めなきゃ……」

「いや、まだオックスとの距離は相当ある。先行している黒メットリオの数はせいぜい五、六匹だ。衝撃波は届かない」

「……なるほど。本隊との合流を防ぐんだな」

「そうだ。ここでお前が弾幕を張り続けたら、いずれ本隊と合流するだろう。そうなったら、さっきと同じ、巨大なエネルギー波をぶっ放されて、お前諸ともゴン太が消し飛ぶ」

確かに……、危険ではあるが、この場では一番有効な作戦か？

「あと、隙間に入り込めば、後続の本隊は前方の味方を気にして衝撃波を放てない」

おぉ！　それはそうだ！

「先行部隊も殺さない程度に攻撃を加えて注意を引けば、進攻速度も遅延できて、尚良し！」

……か、完璧過ぎる。

この状況下でよくぞその作戦を思いついた！

「ロック、この戦いが始まってから冴えてるな……」

「ハハ、そうだろ！？　もっと褒めろ！」

「よっ、ＦＭ星の貴公子！　宇宙大統領！」

野太い笑い声が電波空間に反響する。

さて、黒メットリオとの二回戦を始めよう。

＊　＊

バルカンを再びソードに換えて、先と同じく、突撃を仕掛ける。頃合いを見計らって、先行部隊の一部が僕に向けて衝撃波を放った。

それを、隙間を目指した跳躍で難無く躱すが、念のため、バスター装備から通常装備（つまり、手）に戻してパワーボムを投げて、相殺しておく。もちろん、爆風で先行部隊が消滅しないように気をつける（間違ってもしないと思うけど）。

現実世界換算で２０メートル程度の隙間に降り立つ。

一度、バスターで先行している方に、でたらめにエネルギー弾を撃ち込んでから、振り向いて、狙いを決めた敵のツルハシにバスターを集中させて隙をつくりながら、ソードを構えて、走る。

上手く怯んでいる一匹を掬い上げる形に切り裂く。そこに左右の黒メットリオが攻撃しようとするのを脇目で捉え、振り上がった腕の反動でバク転してえええええぇぇぇぇぇぇっ！？

……こ、こいつら、正気かっ！？

普通に衝撃波、発生させやがったぁ！！

……すぐ真後ろに避けるつもりだったが、バスターから戻した左手を地面に接着させたとき、僅かに風が吹くのを感じて、咄嗟に空中高くに飛び上がって正解だった。

わけもわからないままに、両端から均等に距離を取ってウェーブロードに降りるが、どう見ても衝撃波を撃つ気満々な本隊。

「味方諸とも消し去るつもりか……」
「いや、そうでもないと思うぞ」
ロックが何かを掴んでいるようだが、訊く前に本隊が盛大な衝撃波を放ってくるので敢え無く上空に退散する。
戦場全体を俯瞰するに……。
……ッ！
こいつらっ！
「同じ威力、同じタイミングで衝撃波を両側から放って、真ん中で相殺してるようだな……」
ロックが独り言のように呟く。
「……どうすんだよ。ウォーロック将軍殿」
「ま、まぁ、攻撃はお前に集中して、進攻は止まってるわけだからいいんじゃないか？　もう少し、頑張ろうぜ」
「無茶言うなよ！　さっきまで僕がいたところで星が誕生してるんだぞっ！？　もう退くからな！」
「ぐぬぅ、仕方ないな……」
眩ゆい光が収束したところを見計らってウェーブロードに着地し、即座に戦域を離脱する。
少し離れたところに着地する。攻撃が来ないところをみると、奴らは合流を急いだのだろう。

……結局、ロックが考えた作戦は五分と続かなかったわけか。
時間稼ぎにすらなっていない。

「どうする。これで奴ら、見境無しに衝撃波を撃ってくるぞ」

ディバイドラインも、戦力を分断することも、叶わなくなった今、どうやってオックス・ファイアを守るか。

「おい、委員長。そっちの状況はどうだ？」
『ジャミングは出来るだけ取り除いたわ。ウェーブ・アウトはできないけど、こちらから手繰り寄せられるようにはした。オックス・ファイアの電波を上手く見つけられれば、回収できるわ』
「ならあと少しと考えていいんだな」
『えぇ』
「よし、スバル。後退するぞ」
「え？」
「とりあえず今はオックスの救出だけを考える。奴らが合流しちまったからには、戦いながら巨大なエネルギー波を消すのは無理だ。つぅか、俺達も馬鹿共と同じになっちまう」

……馬鹿共。

「オックスたちの目の前まで後退して、ギャラクシーアドバンス、インパクトキャノンでもって衝撃波を相殺する」
「なっ、あれは隙が大きいし、エネルギー消費が激しいから数える程しか撃てないぞ！」
「隙がでかいのは向こうだって同じだ。あれだけの出力を無反動で使えるわけがねぇ。それにあの衝撃波は長距離には向かない。近接戦闘で最も効果を発揮する」
「で、でもゴン太がやられたとき、ちゃんと僕たちのところにも届

いていたじゃないか」
「あれくらいだったら、バスターのチャージショットで迎撃できたんじゃないか？　俺も焦ってたから言わなかったけど」

ちょ、言えよ！
ってことは、あそこで使ったディバイドライン、まったく無駄だったってことじゃないか！

「それに、奴らは俺とお前の、いや、主に俺の活躍で当初より大きく数を減らしている。だから確実に撃破するために、必ず接近してから攻撃するはずだ。奴らの進攻速度とインパクトキャノンの発射回数から考えて、あと少し、くらいは時間がある」
「……その？あと少し〟が、必ずしも委員長の？あと少し〟と重なるとは思えないけど」
「いや、大丈夫だ」
「どこから来るんだよ、その自信は」

実体化して、不敵に笑う。

「今日の俺は冴えてる」

＊　＊　＊

「委員長、まだか！」
『……あと少し！』

本日、冴えまくりのウォーロック様が言う通り、本当に黒メットリオたちは接近するまで攻撃しなかった。

しかし、まもなく射程圏内に入るであろう距離になっても、委員長の返事は決して芳しくない。

先程の？あと少し〟から今の？あと少し〟、そこにどれだけの差があるのか。

多少焦りの色が増えていた気がするが、大丈夫なのだろうか。

日本語って難しいね。

いや、委員長が悪いのか？

「スバル！　砲台の準備だ！」
「あいあいさー！」

委員長に発破かけちゃったから、緊張を解してあげようと、二人でおどけてみた。

『スバル君、あいあいさー、はないと思う』

現代人に元ネタが何だかわかる人はいない、と痛烈に突っ込まれる。

僕は傷ついた。

「ギャラクシーアドバンス、インパクトキャノン！」
左手を紫色の大口径の大砲に組み換えて、バイザーと連動させて迎撃ポイントに照準を合わせる。
……ん、っていうか、インパクトキャノンの威力をもってすれば、黒メットリオだって殲滅できるのでは？
ロックに訊いてみた。
……呆れられた。
「お前はまったくわかってないんだな。いいか、奴らのヘルメットは、当然ながら奴らのチャームポ……じゃねぇ、強力な防具なんだよ。飛び道具が発射された瞬間に反応して、それですっぽり身体を覆い隠して、跳ね返しちまうのさ。軍事兵器である黒メットリオのヘルメットには大概の攻撃は無力化されるだろうな。つぅか奴らの場合、それ無しでも平気にしてるだろうよ。……兵器だけに」
……え、なんて？
「でも、僕のバスターはちゃんと効いていたじゃないか」
「お前、狙ってやったんじゃなくて、偶然だったのか？　お前が撃破したのは全部、零距離バスターだろうが。離れたとこからの攻撃は、何十発と当てて、せいぜい怯ませていたくらいだろ？」
「あ、そういえば、そうだね」
「……ソードを主軸に据えて、尚且つ攻撃するときも、上手くヘル

メットを避けてやってたから、わかってるものと思ってたぜ。お前は、天然ものなんだな」

天然もの、って何さ。

追及しようとしたら、黒メットリオに動きがあった。

事件、といえば？　０４（後書き）

こんにちは。

最近、投稿が遅くなっていますが、あと少しで終わりです。
なるべく早く完結させたいと思います。

感想、アドバイス等ありましたらありがたいです

事件、といえば？　０５

＊

僅かに離れて向かい側に、戦闘態勢を整えた黒メットリオが互い違いに数列を為して並ぶ。

バイザーの隅に、情報として黒メットリオと迎撃ポイントの様子がモニターされている。特に黒メットリオの方には、ツルハシ一つ一つの通常時と攻撃直前と現在の構える角度やら高さやらの値が書き込まれ、その変化を知ることで寸分狂わず、タイミングが合わせられるっていうか合わせてくれる。

このような情報戦対応な機能はすべて、トランスコードを登録したときに、ＷＡＸＡから一緒に受信した「電波界生活をより豊かにする諸々のプログラム」の中にあった。

ＷＡＸＡが長年続けてきた電波界における様々な事象の正確な計算とウイルスの飼育・観察データの賜物であり、ウォーロックの電波変換能力に含まれるものではない。

つくづく、無能な彼だ。

その黒メットリオたちは、こちらの強い意志をみて、自らを鼓舞しているのか、あるいはもう僕たちをまとめて仕留めたつもりになって喜んでいるのか、ピョンピョンと不規則に跳びはねている。

理由はわからないけど、そして不謹慎だけど、……か、かわいい。

「あれで、衝撃波を一つにまとめるタイミングを計ってるんだ」
冴え渡るロックの解説が入る。
そこに昔日の面影はない。

なるほど、前方の黒メットリオが放った瞬間に跳びはねて、後方から放たれる衝撃波の進路を確保しているのか。
そこに加えて、左右でわざと不規則にジャンプすることで、時間差で放たれた衝撃波がまとまって、あたかもビックバンのような一つの巨大なエネルギー波を形成するのだろう。
横波に揃えないのは、ここに大軍勢がいるのではなく、敵である僕と傷ついて動けないゴン太がかたまっているのをみて、幅のある攻撃よりも、エネルギーを集中させる一撃必殺の方法を選択したというところだろう。

ぬぅ、これではますます僕たちに向かう脅威が強まったということか……。
はたしてインパクトキャノンの威力は、向こうのそれを上回れるだろうか。
もしも、上手く相殺できずに、少しでもエネルギーが抜け出たりでもしたら、反動で動けない僕を吹き飛ばして、そして……。
……いや、今さら、それを考えてあたふたするのも、遅いか。

後ろにオックス・ファイアがいて、開きっぱなしの回線からは焦る委員長の荒くなった息遣いが聞こえてくる。

僕らはもう、解き放たれたものを全力で阻止する他に道はないんだ。

そう思うと、いや、そう意識することで、心臓が、再び早鐘のように鼓動を刻み始める。

血液が身体の隅々まで行き渡り、筋肉が適度に弛み、感覚が尖る。

視界が、世界が、時間が、まるで静止画がめくられているように、一瞬間を逃さずせき止めて、そしてゆっくりと進めていく。

その中で、僕の動きだけが、その枷に捕らえられることなく、流暢に、雲のように、流れていく。

すべて、この賭けに勝つために。

僕の身体は、死を望んでいない。

僕の精神は、ゴン太の死を良しとしない。

僕の生命は、今ここに、戦いを、欲している！

「スバル！　来るぜっ！」

「了解！」

黒メットリオたちのツルハシは、たしかに、あたかもチェッカーフラッグのように、高らかに振り上げられた。

閃光が走るのは、この次ページ。

今は、僕と黒メットリオの、意地のぶつかり合いが、始まろうとしているだけだ。

◆

――どぅおおぉぁッ！！

激しい閃光が、爆音爆風を伴ってえええええぇぇぇっ！

こ、これだけで、大ダメージなきひぃぶううぅぅんっ！！

く、そっ！

きょ、距離が近いだけあって全部が一遍に……くッ、照準が、ず、ズレる……！

まずい、早く、体勢を、立て直、さないと……。

「今だ！　スバルっ！」

……ぐ、ぐぬぬぬぁ、ま、まにあえええええええっ！！

「消えてく――――っ！！」

＊　＊

インパクトキャノンの光線が言葉を掻き消して、想いを乗せて、莫大な反動を残して、空間を切り裂く。

発射の瞬間に起こった視界を遮るフラッシュが収まったときには、前方で、膨大なエネルギー同士の衝突が、電脳空間全体を歪ませ、どす黒いノイズを発生させて、その中心では、激しい光を放ちながら爆発が続いているが……さあ、どうだッ！

渦巻くエネルギーとノイズの塊。

爆発による閃光は、徐々に収束していく。

その中から、抜け出てくるような衝撃波は……ない、か？

「……シッ！　よし！　インパクトキャノンの威力で、十分にイケるよ！！」

「バカ！　さっさとエネルギーをチャージしろ！　喜ぶのは後だ！」

「あ、わ、わかってるよ！」

よしっ！　よしよしよし！
イケるぞ、大丈夫だ！

◆　◆

「第三波消滅確認っと！」

あ、あはははははっ！
ふっ、ふふふ……、今まで、戦闘中に、ここまで嬉しくなったことは、心の中で高笑いをあげてしまうようなことは、なかったよ！

うふふ、これはまた、自分でもわかるくらいに気分が昂揚しているな。
楽しくて、楽しくて、楽しくて、楽しくて、しょうがない。

これが戦闘狂の境地か？
ランナーズハイみたいなものか？

……よくわからないけど、これは意識的に落ち着かせないと、まずそうだな。

しかし、こんなに上手くいっていいのか？
一度どころか、二度三度と、迎撃に成功しちゃうなんてね！

これはもう、大丈夫とみてもいいんじゃないか？
あははっ！

＊　＊　＊

「スバル」
「なに？　そんな急かさなくても、次弾の装填は始めてるよ」
「そうじゃねー！　その弾があと二発分しかないんだよ！」
「な、なんだってーっ！」
「いや、やばい事態だが、最初からわかってたんだから、そんなに驚くことでもないだろう？」
「……ハッ！！」
「なんだ、その、あからさまに忘れてたって顔は……」

しまったぁーっ！？
完全に忘れてたよ、その設定！
あまりの強さに、ギャラクシーアドバンスクオリティに、魅せられてたわっ！！
く、まさか、使用者の心を惑わす麻薬効果付きとは……。さすがはギャラクシーアドバンス……って、納得してる場合じゃないっ！？
やばいやばいやばいやばい！
全然っ、焦り足りてなかった！

っと、とりあえず！　現状把握っ！

「い、いいんちょーっ！」

『バカみたいな声出さないでっ！　調子が狂うわっ！』

「あ、いや、ごめん……」

『ロックマン様なんだから、キリっと、クールに、颯爽と、気品のある物腰で、悠然と構えて、みんなのことを想いながら、でも本当は私のことだけ見ていて欲しいっ！』

「え、えと……」

『はっ！　え、わたしったら……、んんっ、とにかく、そのくらい、どっしりと構えていなさいよ』

「う、うん。わかった。ところで、委員長、あとインパクトキャノンが二発しかないんだけど、いけそう？」

『大丈夫よ。それだとギリギリになっちゃいそうだけど、なんとかするわ』

「そうか、よかった」

『当然よ。ゴン太は必ず助け出すわ』

「うん、そうだね！　あと少しだ、がんばろう！」

そうだよ、焦り過ぎたってダメだよね。

……なんというか、僕、ブレブレだな。

そんな感じで、最後の激励会が終わった。

＊　＊＊　＊

「来るぞ！　スバル！」
「ッ！　早いな……！」

第四波の迎撃に成功して、インパクトキャノンの最後のエネルギー充填が、今、終わった。

前方の黒メットリオはまだまだ元気そうに跳びはねているし、背後には相変わらずオックス・ファイアが気持ち悪そうに眠っている。

いよいよ、大詰め。
これで間に合わなければ、もう次の策はない。

「くっ……！」

感傷に浸る暇もなく、ゴン太の、そして僕と委員長の運命を分ける、光が現れる。

◆　◆　◆

「うおおおぉぉぉぉぉっ！！」

度重なる凄まじい反動を支えてきた左腕は、もはやほとんど感覚がなかった。
それでも、最後のエネルギー弾はしっかりと衝撃波の中心を捕らえ、受け止め、難無く掻き消していった。

「委員長！　どうだ！？」

『あとちょっと！』

インパクトキャノンは役目を終え、元のバスターへ戻される。

＊　＊　＊　＊

「突っ込め！　スバル！」

「応さ！」

右手にソードを構えて、突進。

目的は、向こうの攻撃を遅らせる、単なる嫌がらせだ。

作戦と呼べるものではない。

少しでも、ほんの僅かでも時間を延ばす、威力を弱まらせる。

それで、間に合えば僕たちの勝ちだ。

そんな、負け犬根性を基に、無我夢中で、黒メットリオを、斬り付け、蹴り飛ばし、撃ち怯ませる。

◆　◆◆　◆

途中、気がつかないうちに、笑っていた。

でも次には、涙が零れてきた。

わけはわからなかった。

震えもとまらない。
嬉しいからでも、悲しいからでもない、と思う。
まだ、そんなことを想うときじゃない。
じゃあ、なんで？
……。
そうか、僕は必死なんだ。
感情がコントロール出来なくなるくらい、戦闘に集中しているんだ。
ゴン太に死んで欲しくない。
その一つ願いが、僕を突き動かしている。
他のことなんて、自分がどんなにみっともなく見えようが、関係ない。
そうだ。
僕は、ロックマンなんだ！

＊　＊　＊＊　＊　＊

「スバル、退くんだっ！　もう抑え切れない！」
「まだ、まだだよ！」
「やめろ！　おまえが死んじまう！　とにかく下がれ！」
「嫌だね！　委員長！　次が本当の最後だ！　大丈夫だね？」
『どうしようって言うのよ！？』
「こっちのことは気にするな！　それよりも間に合うのかって訊いてるんだよ！！」
『うッ！　ま、間に合わせるわよ！！』
「スバル……、戻らないと、やべぇぞ……」
「後ろにまだゴン太がいるのに、どうして退けるんだよ！」
「なら、どうするってんだ」
「僕が壁になる。バトルカード、バリア！」
「無理だ！」
「はは、ロック、らしくないね。どうした、怖いのか……？　シールド展開！」
「二重にしたからって……」
「……わかってるよ。でも、やらないわけにはいかないだろう？なに、これだけすれば、失敗しても、僕たちは、死にはしないさ、たぶん」
「……」
「じゃあ、委員長。成功しようがしまいが、僕は吹き飛んじゃうから、もしものことがあったらよろしくね。……さぁ、ロック。悪いけど、きみには嫌でも付き合ってもらわなきゃいけないよ。死ぬときは一緒に、って約束したよね。……あの展望台でさ」

＊＊

「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

前面にバリアとシールドを二重に展開していたおかげで、衝撃波の己が体重全てを乗せた衝突の瞬間こそ耐えられたものの、波はすぐさま、バリアの壁に沿って全面に広がり、重圧が渦を巻く明るい底無し沼へと引きずり込んだ。

バリアはあちらこちらが、音をたてて、目に見える勢いで亀裂が入っていく。シールドもバリアの歪みからの重みで、とんでもなくひしゃげている。

それでも、委員長の朗報が来るまでは、と中から莫大な電波でもって亀裂を取り繕いながら、かかる力を押し返し続ける。

◆◆◆◆◆

白の世界。

字面的に美しそうなイメージだが、それほどでもなく、そもそも海底二万マイルほど潜ったような堪えようのない締め付けがあって、それどころではない。

つまりこれは、夢でも、幻覚でも、死後の世界でもなく、単純に、黒メットリオの衝撃波の中にいるってことだ。

死の危機に瀕してるわけだから、所謂走馬灯の中って言っても構わないのだけれど、残念ながら、そんな安らかな感覚じゃないのよね、これが。

いっそのこと、なうゆーあーいん死後世界、って言われたほうが諦めもつくってくらいに。

……でもね、痛苦しいけど、つらくはないんだ。

人の運命に干渉するのは並大抵のことではない。

この痛みはあって然るべきなんだよ。

それでもつらくない、むしろ清々しいのは、僕がマゾヒストなのではなく、自分の行為に、人を助けているっていう一種の自己満足めいた目的を見出だせているからだろう。

自分のおかげで、他人が少しでも幸せになってくれたら、どんなに嬉しいことか。

人を助けるってのは、つまりそういうことだ。

善意の押し売りとか、っていうかまんま自己満足だろとか言われたら、そうかも知れない。でも、やっぱり人を助けるからには、そこに歴とした結果があって、それが自分にとってもご褒美みたいなものであって欲しいじゃないか。

その人が救われるとか、ありがとうって言ってもらえるとかね。

だから僕は否応なく人を助ける。

ただ、それは直接誰にも彼にも手を差し伸ばすことを意味していない。

時に、見捨てることも救済の一つと成り得るのだ。

そういう意味で、僕、いや、全ての人は常に人を助け続けている

のである。

まぁ、でも、今日は手を差し延べる日だったようだ。
それは僕じゃないけどね。

『捕まえたわよ！　ゴン太！　さっさと起きなさいっ！！』

天使の声。
そして、ここは白の世界。

＊＊　＊＊

はじけた。

視界が暗転。

浮遊感よりも、風を感じる。
全身に、電気が走り、ひたすら殴打され、じわじわと痛みが奥へ奥へと浸透していく、そんな感覚。

不意に、風が止んだ。
同時に、激しい衝撃が背中を襲う。

「でもね、不思議と、悪くないんだ……」
「……冗談じゃねぇぞ。おまえの趣味に付き合わされる俺の身にもなれや、このバカタレが」
「ゴン太も助けられたようだし、けっこうじゃないか」

先程までオックス・ファイアが倒れていた場所に目をやる。
ちゃんと、姿はなかった。

そういうわけで、なんとか役目を終えて、バリアが崩壊して吹き飛ばされていたのでした。

「けっ、くそ、俺は痛めつけるのは大好きだが、逆は大嫌いなんだよ。……ふふん、普段強すぎて負けないから免疫がないんだ。へっへ、羨ましいだろ」
「いやいや、考えてもみろよ。痛覚を気持ちいいって言えるのって、もはや最強だよ？　どんな攻撃も無効化されるんだぜ？」
「でも、その効果が発動するのは、女の、特に可愛子ちゃん限定だろ？　今だって、実際死にそうな顔してるしよ。おまえの人生じゃ使い道ねぇじゃねぇか」
「たしかにな。僕ほどのイケメンが女の子から邪険に扱われる機会はそうないだろうからな」
「そうじゃねぇよ！　おまえみたいなブサイクに、美人との接点があるはずねぇって言ってんだっつーか、どうでもいいから、さっさとリカバリーカード入れろや！！」
「ちょ、ひどっ！　親友からブサイクって言われた！！」
「たのむ……、ふざけないで、ほんと、はやく、かいふく……してくれよおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！」

はいはい、わかったよ。

必死とは言え、気持ち悪いから、そんなに体液にまみれないでくれ。

えと、リカバリー、リカバリーっと。

……ふぅ、少しはよくなったよ。

っていうか、そんなこと言うけど、僕にだって、美人さんとの接点ルートくらいあるだろうさ。

現に、ミソラちゃんとか、委員長とか、ツカサ君とか、将来に見込みアリの娘とお近づきさせてもらってるじゃないか。

「そこに平然とツカサを入れられるおまえは、まったくもっていよいよだな」

「何故心が読める」

「口に出してたぞ？」

「なんと！」

『あ、あれ？』

そこに困惑しているような委員長の声が耳に入ってきた。

おっと、通信回線、開いたままだった。

これはいけない。

お馴染みの、色々と怒られてしまうよくわからないルートに突入してしまう！

『――――こない』
「え？」
一瞬にして、血の気が引いていく。
「い、委員長？　今、なんて……」
あまりに絶望的な音の響きで、上手く言語に起こしてやることができなかった。
『う、うぅ……』
しばらく、委員長の嗚咽だけが聞こえる。
僕の方も、その間に対して、イライラできるほど、冷静ではなかった。
そして、無理に絞り出したような声で、ゆっくりと言った。
『ゴン太が、かえって、こないの……』

◆　◆　◆◆　◆　◆

……ゴン太が死んだ。
委員長は、たしかに彼の微弱な電波を発見して手繰り寄せたと言

っているが、その先に何もついていなかったらしい……。
彼は、どこかの電波の狭間に落っこちてしまったのだろうか。
それとも、僕と委員長が間に合ってなくて、デリートされてしまったのだろうか。

「メットメトメトメトメトメト――」

涙は、出てこない。

……。

彼を助けられなかった。

あれほど、大層な独白を入れておきながら、僕は、彼の命を救い上げることができなかった。

そうだ、僕のせいだ。

委員長は精一杯やった。
大海原に投げ入れられた小さな真珠を探し当てるが如く、瀕死のオックス・ファイアのほぼ無に等しい貧弱な電波を見つけ出して引っ張るところまでいったんだ。

こんな雲を掴む業を成した彼女を、どうして責められようか？

「メットメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメトメッ――」

対して、僕はやはり、どこかこの状況を楽観視していたのかもしれない。

今思い返してみると、どの場面にも緊張感が、まるで足りていない。

……。

ゴン太は、そんな僕の背中を見て、何を思っていただろう。

俺の死を無駄にするな。

彼はそう言った。

あれは、本当に冗談だったのか……？

僕に、何か大切な――。

「メットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメットメット――！」

「あぁ、もう、うるっさいなぁっ！！」

……。

……あぁ、僕は、やっぱりどこかで出し惜しみをしていたようだ。

どうして。

どうして、一撃で倒せたのに、最初からそうしなかったんだ？

これを、復讐パワーとか、絆効果とか言って片付けてしまうのか？

親友の死に際して、自分の中の潜在的能力が発現したって？

バカか、何ナマ言ってんだ。
言い訳もいい加減にしろよ。

自分が実力を見誤ったせいで、親友が死んだって認めろよ。

……。

……ごめん、ゴン太。

それでも、涙が出てこないんだ。

事件、といえば？　０５（後書き）

あと2、3話で終了です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7805p/

星降る夜になったら

2011年5月4日18時29分発行